ヨッ！　大統領！

ガルウーガ

登場人物

ドン・コルネ（５０）
・・・ソダベナ共和国大統領、元お笑い芸人
エメリーナ・ペンネ（３５）
・・・・・・大統領補佐官、アイドル出身
ムッシュ・ドリア（５０）
・・・・・・・・・・・・コルネの相方
ケン・マハジ（３３）
・・・・・・・・・・元貿易会社ＣＥＯ
ヘル・モンジャナ（５９）
・・・・・・・・ロンガイア連邦最高議長
サモ・アリナン（６３）
・・・・・・・・・ロンガイア連邦首相
コーデ・ネート（６５）
・・・・・・・・ロンガイア連邦総司令官
ミザール・イワン（４２）
・・・・・・・・ロンガイア連邦諜報部長
ベシャール・デマー（５６）
・・・・・・・・・・・・ＴＶ司会者
ソバーロ・ニハチ（４５）
・・・・・・・・・コルネの元マネージャー

○Ｔ「いつか、どこかの世界で」

○都会の街角
人々が盛んに行き交う賑やかな大通り。
その一角にあるビルの大型ディスプレイで臨時ニュースが始まる。

○同・ディスプレイ画面
ベテランアナウンサーＡが、固い表情でニュースを伝えている。
アナＡ「この時間は予定を変更してニュースをお伝えします。只今から大統領の緊急会見が行われます。繰り返します。まもなく官邸に於いて我がソダベナ共和国大統領、ドン・コルネ氏の緊急会見が始まります」

○同・街角
道行く人々が次々と足を止め、ディスプレイを見上げ始める。

○同・ディスプレイ画面
スタジオのモニターをバックにアナＡが伝える。
アナＡ「会見が始まるまで、現在、我が国が直面している事態について説明いたします」
モニターに、階級章がびっしり並んだ軍服に身を固めた厳つい男の写真が映し出される。
画面下には「ロンガイア連邦最高議長、ヘル・モンジャナ氏」のテロップ。
アナＡ「先日、隣接する北の大国ロンガイア連邦のヘル・モンジャナ最高議長が突如、我が国に向け声明を発表いたしました」
執務室のソファーにゆったりと腰掛け、愛猫を撫でながら淡々と語り掛けるモンジャナ（５９）の映像が流れ始める。
モンジャナ（映像）「猫の額のような小さな隣国、ソダベナ共和国の皆さんに朗報を伝える。我が偉大なるロンガイア連邦はこの度、かの地を併合する事を決定した。喜び

たまえ、ソダベナはロンガイアの一部となるのだ」
アナＡ「声明後、モンジャナ氏は直ちに国境付近に軍隊を集結させ、我が国に対し軍事侵攻の構えを示唆しました」
整列するロンガイア兵、進軍する戦車部隊などの映像が流れる。
アナＡ「それに対し我が国は緊急議会を招集し、対抗措置が検討され、現在着々と軍備が整えられつつあります」
議場で口角泡を飛ばし議論する閣僚らの様子が流れた後、続々と集められるソダベナ民兵の映像が映し出される。
アナＡ「両国間は日に日に緊張が高まっており、後は我が国最高指導者、ドン・コルネ大統領の決断を待つばかりとなりました」

〇同・街角
沿道には大勢の人々が集まり、皆不安そうにディスプレイを見上げている。

〇同・ディスプレイ画面
チラッと横に目を送り、軽く頷きながらアナＡ、口を開く。
アナＡ「会見が始まる模様です。では大統領官邸からどうぞ」
画面は官邸会見場に切り替わる。
中央にでんと鎮座する演台、後ろにはソダベナ国旗が厳かに飾られている。

〇官邸・会見場
大勢の報道陣が集まり、今や遅しと大統領の登場を待ち侘びている。
会場の隅には閣僚たちが険しい表情で様子を見守っている。
と、奥からかなりガラの悪い中年男が肩で風を切りやって来る。
一斉に静まり返る会見場。
演台に手を置き、すっくと立つ強面の大統領、ドン・コルネ（５０）。

グッと前を睨み、彼は第一声を発する。
コルネ「国民の皆さん、重大発表をいたします。我がソダベナ共和国は今回のロンガイア連邦の軍事侵攻に対し・・・」
一斉に注目する報道陣
粛々と耳を傾ける閣僚たち。

○都会の街角
すでに沿道は黒山の人だかり。
全員固唾を飲み、ディスプレイを見上げている。

○官邸・会見場
暫しの沈黙の後、コルネは言い放つ。
コルネ「一切、抵抗しない事を決定しました」

○都会の街角
シーンと静まる沿道。
皆、唖然としてディスプレイを見つめ、固まっている。

○官邸・会見場
思わず目を見張る閣僚たち。
報道陣も皆、耳を疑っている様子。
コルネの後ろに立つＳＰまでも顔を見合わせている。
コルネはざわつく会場をじっくりと見渡し、清々しい顔で宣言する。
コルネ「ソダベナはロンガイアに、正々堂々と、全面降伏いたします！」

○タイトル「ヨッ！　大統領！」

○ソダベナ共和国・首都モッツーニ大通り
人や車の行き来が途絶え、ひっそりと静まり返った首都の大通り。
小鳥だけがのんびりと囀っている。
と、微かに聞こえて来る地響き。
彼方から足並みを揃え進軍するロンガイア兵の隊列が見えて来る。

すぐ後からは屈強な戦車軍団の姿。
先頭車両にはモンジャナが乗り込み、
防弾ガラスで覆われたハッチから半身
を乗り出し、ジッと前を見据えている。

○進軍する戦車軍団・先頭車両

なぜか不機嫌そうな顔のモンジャナ。
並走する軍用車両に乗ったサモ・アリ
ナン首相（６３）がそっと彼の顔色を
窺っている。

ふいにモンジャナ、声を荒げる。

モンジャナ「全面降伏だと？　ふざけるな！
まだ一発も銃弾を発してないではないか！
誰一人、敵を倒していないではないか！」

恐る恐るアリナンが進言する。

アリナン「しかし閣下、味方の犠牲も出てな
い事ですし、よろしかったのではないかと」

モンジャナ、キッと首相を見下ろし、

モンジャナ「何をぬかすアリナン！　これで
は折角鹿狩りに来たのに、獲物はすでに檻
中に入っておった、てなものではないか！
私はドンパチがやりたかったのだ！　崩れ
落ちる都市が見たかったのだ！」

突然、兵団を先導する師団長が前方を
指差し、声を上げる。

師団長「最高議長！　あれを！」

○同・大通り

反対方向から、プラカードを手にした
群衆が向かって来ている。

○同・先頭戦車

モンジャナ、ジッと前方を睨み、思わ
ずほくそ笑む。

モンジャナ「・・・そう来なくては」

モンジャナ、兵士らに叫ぶ。

モンジャナ「構わん！　抵抗する者は皆撃ち
殺してしまえ！　奴らにロンガイアの恐ろ
しさをとことん叩き込んでやるのだ！」

アリナンが慌ててて口を挟む。

アリナン「閣下！　非武装の一般市民を攻撃したら国際問題になりますぞ！」
モンジャナ「たわけっ！　あれが我々に対する歓迎のセレモニーに見えるかっ！　私は鹿せんべいを持って奈良公園に来てる訳ではなーいっ！」

○同・大通り
群衆は怯むことなくまっしぐらに向かって来ている。
（フラッシュ）
奈良公園、まっしぐらに鹿せんべいに向かって来る鹿の大群。

○同・先頭戦車
モンジャナ「見てろ、飢えた鹿どもめ」
モンジャナ、速やかに砲手室へと潜り込む。

○同・砲手室
スコープの画面はしっかりと群衆を捉えている。
モンジャナ、狙いを定め、引き金に指を掛ける。
モンジャナ「よーし、もっとこっちへ来い」
ところが突然、スコープの中の群衆、向きを変え、横道へと向かい始める。
思わず目をパチクリさせるモンジャナ。
モンジャナ「・・・曲がった！」

○同・先頭戦車
モンジャナ、急いでハッチから身を乗り出し、呆然と群衆の行方を見つめる。

○同・大通り
群衆の波は次々と角を折れ、横道へと流れ込んで行く。
ロンガイア兵らは皆、目の前を横切る市民らをポカンと見つめている。
思わず師団長、群衆に声を掛ける。

師団長「おい！　みんなどこへ行くんだ！」
プラカードを手にした一人の男が面倒臭そうに返事をする。
一人の男「ああっ？　アンタらはあとあと！」
プラカードには「コルネ、死ね！」と書かれてある。

○ソダベナ大統領官邸
官邸入り口。
建物を囲む鉄柵前は、すでに大勢の人で埋め尽くされている。
そこへ後から後からプラカードを手に群衆が押し寄せて来る。
皆官邸に向かい「裏切者！」「腰抜け野郎！」「出て来い！　コルネ」などと怒号を浴びせ掛けている。

○同・執務室
ドンドンドンとドアを叩く音。
大慌てで呼び掛ける秘書官の声が響く。
秘書官Ａ（声）「大統領！　ドン・コルネ大統領！」
バタンとドアが開き、秘書官らが飛び込んで来る。
部屋を見回す秘書官たち。
中はもぬけの殻。
秘書官Ｂ「いない！」
秘書官Ａ「どこへ行ったんだ！」
バタバタと探し回る秘書官。
彼らの足元には暖炉が燻ぶり、その床はポッカリと穴が開いている。

○地下通路
薄暗いトンネル。
男がコソコソと小走りに駆けて来る。
コルネである。
ふと立ち止まり、辺りをうかがい安堵の表情を浮かべるコルネ。
と、背後で女の声。
女の声「逃げる気？」

思わずドキッとして振り返るコルネ。
エメリーナ・ペンネ（３５）がジッと
コルネを睨んでいる。
コルネ「なんだ、エメリーナか」
エメリーナ「大統領補佐官と呼びなさい！」

○ソダベナ国・首都モッツーニ大通り
静まり返った首都の大通り。
ポツンと取り残されたロンガイア軍団。
モンジャナがハッチから身を乗り出し、
ぼんやり誰もいない街を見つめている。
空には小鳥がのんびり囀っている。

○ソダベナ某テレビ局・スタジオ
「ＯＮＡＩＲ」のランプが灯り、スタ
ジオに賑やかな音楽が流れ始める。
ディレクターが大きく手を振り、観客
が拍手、ベシャール・デマー（５６）
が笑顔で登場する。
デマー「皆さん、こんにちは。ベシャール・
デマー・ワイドショーへようこそ」
いきなりデマー、表情を曇らせ、
デマー「いやあ、大変な事になってしまいま
した。一体どこへ雲隠れしてしまったんで
しょう？　ドン・コルネ大統領は」
スタジオの中央には朗らかに笑うコル
ネの顔写真パネルが置かれている。
その後ろでは文化人然とした数人のコ
メンテーターが席に着き、頷きながら
話を聞いている。
デマー「官邸の発表によると補佐官のエメリ
ーナ・ペンネ女史も一緒だというじゃない
ですか。まったく何を考えてるんでしょう
かね、二人とも」
デマー、差し棒を手に取り、モニター
へと向かう。
モニターには世論調査の結果が映し出
されている。
デマー「これが今回、当番組が独自に調査し
た最新の大統領の支持率です。『支持する』

三%、『支持しない』四十二%、『どちらともいえない』六十七%、そして『国家の恥さらし』が八十五%。なんと、支持率マイナス三十%という驚くべき結果が出てしまいました」

コメンテーターたち、厳しい顔で頷く。

デマー「ホントとんでもない奴ですよ、こいつは」

デマー、コルネのパネルを差し棒でパシパシと叩きつつ、

デマー「さて、ここでドン・コルネ大統領の経歴を簡単にまとめてみました」

コルネの略歴が書かれたフリップを手にアシスタントの女子アナBが登場、解説を始める。

女子アナB「はい。ドン・コルネ氏は芸能界出身の大統領として知られ、元々は『ブレッド・オア・ライス』というお笑いコンビで活躍されていました」

モニターにコントをする若き日のコルネと相方の映像が映し出される。

薄笑いを浮かべ、デマーが口を開く。

デマー「キレのある渾身のツッコミで評判でしたけどねえ、コルネは」

女子アナB「ええ、私も大好きでした。コンビは第三回コメディグランプリなど、数々の賞に輝きましたが、その後解散。コルネ氏は政界に進出し、それからは皆さんもご存知の通り、あっと言う間に大統領にまで登り詰めました」

デマー「それが、今回突然の失踪となった訳ですが、やっぱりタレント出身の大統領なんて駄目だって事ですかねえ」

突然横から男の声。

男の声「違います」

デマー「えっ？　何がですか？」

男の声「ブレッド・オア・ライスはまだ解散してません」

カメラが切り替わり、ゲスト席に向けられる。

ゆったりとしたソファーにムッシュ・ドリア（５０）が悠然と腰掛けている。
デマー「あっ、ご紹介が遅れました。本日は特別ゲストをお迎えしています。元相方のムッシュ・ドリアさんです」
スタジオ内拍手。
デマー、ゲスト席に着く。
ドリア「よろしくお願いします」
デマー「そうですか。解散はしてなかったんですね」
ドリア「ええ、ですから元相方という言い方も正確ではありません」
デマー「これは失礼しました。で、お伺いしたいんですが、相方から見て、コルネとは一体、どういう人物なんですか？」
ドリア、得意げな顔で、
ドリア「ああ、あいつは昔っから調子のいい野郎で、世渡りだけは人一倍旨いんです。もうそれだけで大統領になったようなもんっすよ」
デマー「言い切りましたね」
ドリア「実は一緒に逃げてるエメリーナなんですが」
デマー「大統領補佐官の？」
ドリア「彼女は元々アイドルグループＢＮＮイチマルハチのメンバーだったんですよ」
デマー「そんなグループがあったんですか？全然知りませんでした」
ドリア「ここだけの話、一時期二人は付き合ってた事がありましてね」
デマー「ほう」
ドリア「でもある時コルネが他に女を作っていた事がバレちゃったもんだからもう・・、大変な修羅場になっちゃって」
笑いをこらえながら話すドリア。

○高速道路を走る高級車。
黒塗りのスモークウインドウ仕様の高級車が高速道路を疾走している。

○同・車中
コルネ「くそ～、あの野郎、余計な事をベラベラ喋りやがって」
後部座席でコルネが、忌々し気に小型テレビを睨んでいる。
画面には得意顔で喋るドリアの姿。
コルネはちょび髭を生やしサングラスを掛け、白いスーツに開襟シャツ姿の如何にもその筋の人といったスタイル。
運転をする姐さん風のエメリーナが遠い目で呟く。
エメリーナ「ブレッド・オア・ライスのドン・コルネにムッシュ・ドリアか。懐かしいわぁ」
コルネ「今考えるとふざけた芸名だな。ネジネジの菓子パンに洋風焼きメシだぞ」
エメリーナ「そうよねえ。何だったかしら、あなたの本名・・・、もう忘れちゃった」
コルネ「どうだっていいよ、そんなもん」
エメリーナ、ルームミラーに映るコルネをチラ見し、
エメリーナ「アンパンマン・・だっけ？」
憮然とするコルネ。
コルネ「おい、お前俺の顔見て言ってるだろ」
エメリーナ「にしてもあなた、ホントその恰好が良く似合うわねぇ。どう見ても本物よ」
コルネ「うるせえな。この方が都合がいいんだよ。誰も寄ってこねえからな」
エメリーナ「どこへ逃げるつもり？」
コルネ、ふと考え込み、
コルネ「さて、どこへ行ったもんかな。東のヘバダス公国へ行くか、南のラーズラ王国か、それともこの際遥か西のダギャー帝国かデンガナ合衆国まで足を延ばすか」
エメリーナ「無理よ。どうやって国境を超えるってのよ」
コルネ「・・・」
エメリーナ「そんなチープな変装、すぐにバレるに決まってるじゃない」

○都会の街角の大型ディスプレイ
ビルの大型ディスプレイ前に人だかりが出来ている。

○同・ディスプレイ画面
アナＡがニュースを伝えている。
アナＡ「ソダベナがロンガイアの支配下に置かれて早一週間。侵攻を受けた首都モッツーニから中継が繋がっています」
画面が街中でリポートする記者Ａに切り替わる。
背後には険しい顔で銃を肩に闊歩するロンガイア兵らの姿。
記者Ａ「はい。街は一見穏やかな日常を取り戻したように見えますが、あちこちに銃を手にしたロンガイア兵の姿が見られ、ここソダベナの首都ではいつ騒乱が起きてもおかしくない状況、正に一触即発の様相を呈しております。それに対し市民らは皆一様に不安の色を隠せないといった様子です」

○同・モッツーニ大通り
マイクを手にリポートする記者Ａ。
その前には彼を撮るカメラマンＡとディレクターＡの姿。
ディレクターＡ「ハイ、ＯＫでーす」
記者Ａ、マイクを外すと、なぜかロンガイア兵らに声を掛ける。
記者Ａ「お疲れ様でしたー」
途端に笑顔に変わり、担いでいた銃を肩から降ろすロンガイア兵ら。
ディレクターＡ「有難うございました。これで一杯やってください」
そう言い、兵らにお金を渡すディレクターＡ。

○モンジャナ宮殿・外観
広大な敷地に聳え立つバロック調の巨大な建築物。
庭園には噴水も噴き上がっている。

○同・絨毯が敷かれた広い通路
いそいそとアリナンが歩いて来る。
向かう先には執務室の重厚なドア。
アリナン、ドアの前に立ち、襟を正して三回ノック。
と、同時にドアが開き、中から満面の笑みを湛えた小柄な中年男が出て来る。
男はアリナンに深々と頭を下げ、後ずさりで去って行く。
が、アリナン、ふと窓から差す日の光を受け床に落ちる男の影を見てギョッとする。
巨大な角と長く鋭い尻尾が生えている。
思わず男を二度見するアリナン。
しかし目に映るのは、ごく普通の中年男の後ろ姿。

○同・執務室内
壁には彫刻が施され、高い天井からはシャンデリアが下がる豪華な一室。
モンジャナが渋い顔をしてデスクで考え事をしている。
ふとドアに目を向けるモンジャナ。
アリナンが頻りに首を捻っている。
モンジャナ「どうかしたのか？」
アリナン「閣下、今の方は？」
モンジャナ「ハピネス産業の営業マンだ」
アリナン「ハピネス産業？・・・ああ、兵器メーカーの？　・・・なんだか角と尻尾があったような」
アリナン、腑に落ちない様子でドアを閉め、中へ入る。
モンジャナ「買い付けた武器の支払いを迫って来た」
アリナン「・・・随分買い込みましたものねえ、今回のソダベナ侵攻に向けて」
モンジャナ「全くとんだ見込み違いだったよ。まあ、それはいい。ソダベナに国家賠償を迫ればいいだけの事だからな」

アリナン「では・・、何か問題でも？」
モンジャナ「現在、我が軍が抱えている大量の在庫だよ。消費期限が迫っているのだ」
アリナン「えっ？　武器に消費期限なんてのがあるんですか？」
部屋の隅からコーデ・ネート総司令官（６５）が口を挟んで来る。
ネート「あるんだよ。メーカーが定めた安心安全に使用出来る期限というものが」
アリナン「（呆れ顔で）そんなの、向こうが勝手に言ってる事じゃ・・」
言いながらネートに気付くアリナン。
アリナン「おや？　コーデ・ネート総司令官、いらしたんですか？」
ネート「いたよ、さっきからずっと」
モンジャナ、忌々しげに、
モンジャナ「ハピネス産業はあくまで最新の軍事用品を扱う会社だから、兵器の下取りには応じられないと抜かしおった」
ネート「どうします、閣下。テロ組織にでも払い下げますか？」
モンジャナ「それだけはいかん。飼い主の手を平気で噛むような連中だ」
アリナン「では・・、また大々的に軍事演習でも行われてはいかがですか？」
モンジャナ「ああ、もう飽きた！　つまらん、軍事演習など。そんなもの幾らやったって、サンドバッグに浮かんで消える憎いあん畜生の顔目掛け、パンチを叩いているだけだ」
モンジャナ、二人をグッと睨み、
モンジャナ「実戦で使ってこそ兵器！」
アリナンは俯いたまま黙っている。
渋々ネートが口を開く。
ネート「分かりました閣下。では取り合えず何とかやりくりをして、期限切れの在庫は我が総司令部統合基地で一時的にお預かりしておく事にいたします」

〇ソダベナ国議事堂・外観
威風堂々と聳え立つ大時代な建物。

〇同・議場

議場に閣僚たちが集まり、喧々諤々と議論を交わしている。

押し出しのある男が手を上げる。

年配の議長が名を呼び上げる。

議長「ゴバク・バーン国防長官！」

バーン「このままでは我が国のメンツは丸潰れです。今こそロンガイアに反撃すべきだと私は強く、皆さんに訴えます！」

インテリ風の議員が手を上げる。

議長「ナカノグ・コシアンデス産業長官！」

コシアンデス「メンツだけで済めばいいのですが、併合により、我が国産業界が大打撃を受ける事は必至かと思われます」

艶っぽい女性議員が手を上げる。

議長「アイジーン・フリン司法長官！」

フリン「いえ、むしろ問題は連邦による内政干渉です。これは国家という家庭に割り込んで来る厚かましい妾のような存在以外の何物でも・・・」

ふいに背の高い議員が立ち上がり発言を始める。

背の高い議員「いやそれより、私は諸外国との関係悪化を危惧します！」

議長が激しく叱責する。

議長「手を上げてから発言してください！

キンス・バラマキー外務長官！」

間髪入れずに再びバーンが手を上げる。

議長「ゴバク・バ・・」

そそくさと発言を始めるバーン。

バーン「すでに世界的シェアを持つハピネス産業から武器提供の打診を受けています。ここは一つ、大統領の代わりに誰かが手を上げ指揮を取り、ロンガイア攻略にまい進すべきだと私は強く、皆さんに訴えます！」

途端にシーンと静まり返る議場。

誰一人、手を上げる様子がない。

憮然と議長が呼び掛ける。

議長「誰か手を上げる者はいませんか！」

議場は静まり返ったまま。
議長「いませんかっ！」
と、ふいに議場にどよめきが走る。
一人の老議員が手を上げている。
議長、大きな声で名を呼び上げる。
議長「クラシブリ・ハデスカネ財務長官！」
ハデスカネ、おずおずと立ち上がり、
控えめに発言を始める。
ハデスカネ「あの、その前に・・、皆さんに
ご報告しなければいけない事があります」
議長「何をですか。速やかに答えなさい！」
ハデスカネ「今、ロンガイアに反撃するのは
無理かと思われます」
再び議場に大きなどよめきが走る。
議長「なぜですか。明確に答えなさい！」
ハデスカネ「先立つ物が・・、ないからです」
ガヤガヤと騒めく議員たち。
議長「皆さんご静粛に！　一体何があったの
ですか？　包み隠さず答えなさい！」
ハデスカネ「実は、今年度の軍事費がそっく
り無くなっているのです。どうやら、持ち
逃げされてしまったようで・・」
議長、愕然としながら問い質す。
議長「誰にですか？　怒らないから正直に答
えなさい！」
ハデスカネ、戸惑いつつ口を開く。
ハデスカネ「誰にですかって・・、そんな事
が出来る人、我が国にはたった一人しか、
いないではないですか」

〇ソダベナ国・駅前広場（朝）
通勤ラッシュで込み合う都会の駅。
その駅前平場に大きな人だかりが出来
ている。
新聞社の社員らが行き交う人々に号外
を配っている。
社員Ａ「号外！　号外！　号外でーす！」
社員Ｂ「ドン・コルネ、国家予算横領！」
紙面には札束を抱え笑うドン・コルネ
のコラージュ写真が踊っている。

○モンジャナ宮殿・執務室

モンジャナがゆったりとソファーに腰掛け、猫を撫でながらテレビを眺めている。

画面では厳つい中年女性アナCが、勝ち誇ったようにニュースを伝えている。

女性アナC（画面）「偉大なる我がロンガイア指導者、ヘル・モンジャナ最高議長に恐れをなしたドン・コルネ。彼はとうとう犯罪者にまで成り下がりました。なんと国家予算を持ち逃げしていた事が発覚したのです。動揺を隠せないソダベナ議会は、最早政府として機能を果たせない事態にまで追い込まれ、今やソダベナはロンガイアの差し伸べる手に縋るしかない状況になりつつあります」

モンジャナ、吐き捨てるように呟く。

モンジャナ「これだから、民主主義はいかんのだ」

○ソダベナ某テレビ局・スタジオ

カメラ目線でベシャー・デマーが切々と語り掛けている。

デマー「一体なぜ、このような男を大統領に選んでしまったのでしょう？　私たち国民は大きな過ちを犯してしまいました」

隣りには物凄く目付きの悪い顔で写るドン・コルネのパネルが置かれている。

更にその隣では腕組みをしながらしみじみとムッシュ・ドリアが呟いている。

ドリア「わたくしも、誠に遺憾に存じております」

途端に後ろにいるコメンテーターたちから非難の声が飛ぶ。

コメA「そんな他人事みたいに言っていいのか！　ムッシュ・ドリア！」

コメB「そうよ、あなた、相方でしょ？」

コメC「おたくにも責任の一端があるんじゃないのか！」

コメD「そうだ！　アンタも同罪だ！」
　ドリア、思わずたじろぎ、
ドリア「違う！　私は元相方。ブレッド・オア・ライスは解散した！」
コメE「何を今さら！　コンビと言えば一心同体。言ってみりゃ同じ穴のムジナだ！　きっとアンタも大統領になったら同じ事をしたに決まってる！」
ドリア「誤解だ！　コンビを組んでる時も、ネタを考えていたのは全部アイツで、私は何にもしていなかった。私はただ、アイツの言う事をハイハイと聞いていただけだ！　操り人形だったんだよ！　俺は」
　苦笑いを浮かべデマーが割って入る。
デマー「まあまあ皆さん、落ち着いて・・・」
　デマー、チラッとスタッフに目を送り、
デマー「ここで最新のニュースが入って来たもようです」
　原稿を手に女子アナBがやって来る。
女子アナB「お伝えします。たった今、政府が声明を発表しました。今回の軍事費横領事件に於いて、議会はドン・コルネ大統領を容疑者に切り替え、全国指名手配する事を決定いたしました。政府はドン・コルネ大統領に対し、断固たる措置を取る構えであると表明しました」

〇代官屋敷のセット
　江戸時代の百姓の格好をした役者らが屋敷の庭で土下座をしている。
百姓A「お代官様～、おねげえしますだ～！　何とかお慈悲を～！」
百姓B「このままではおらたち、皆飢え死にしちまうだよ～！」
　すがる百姓らを蹴飛ばし、悪代官が怒鳴り散らす。
悪代官「ええい、ならぬ！　逆らう者はこの場で切り捨てるぞ！」
　彼らの前には撮影隊。
　監督の「カット！」の声が飛ぶ。

脇では大勢の百姓姿のエキストラが竹槍を手に待機している。
その中に小作人夫婦に扮したコルネとエメリーナが紛れ込んでいる。
と、コルネ、突然セットの裏に隠れ、地団駄を踏み出す。
コルネ「くそっ、やられた！」
エメリーナ、思わず後を追い、訊ねる。
エメリーナ「どうかしたの？」
コルネ、スマホを覗き込みながら悔しそうに呟く。
コルネ「口座を凍結された」
エメリーナ「ああ・・、思った通りの展開ね」
声を殺し話すコルネとエメリーナ。
コルネ「どうしよう。もう俺の金を引き出せねえ」
エメリーナ「俺の金って、あなたのお金じゃないでしょ？」
コルネ「何言ってんだ、俺は国家元首だぞ。国の金を着服してどこが悪い。みんなやってる事じゃねえか」
エメリーナ「あっ、開き直った。すっかり政治家が板に付いたもんね」
コルネ「・・・誉め言葉だと思っておく」
エメリーナ「じゃあ、没収されるのも時間の問題か」
コルネ「いや、それはない」
エメリーナ「どうして？」
コルネ、不敵な笑みを浮かべ、
コルネ「全部暗号通貨に換えておいた。例え国家でも手は出せねえさ」
エメリーナ「呆れた。よくもそんな悪知恵を思い付くわね」
コルネ「当たり前だ。これ位頭が働かなきゃな、大統領になんかなれねんだよ！」
エメリーナ「しっ・・声が大きいわよ」
コルネ「しかしもうこの国にはいられねえな。急いで脱出しなきゃ」
エメリーナ「何度も言ってるでしょ、そんなの到底無理よ」

コルネ「なんとかならねえか？　エメリーナ」
エメリーナ「・・・」
コルネ「なあ」
エメリーナ「・・・」
コルネ「なあ・・って」
　エメリーナ、ふいにニヤリと笑い、
エメリーナ「一つだけ・・・、方法があるわ」

〇某国際空港・滑走路
　次から次へと旅客機が離発着している
　滑走路の隅で、大型機の荷下ろし作業
　が行われている。
　荷物の中に大きな木箱が混じっている。
　と、フォークリフトがやって来て、な
　ぜかその箱だけをピックアップ、どこ
　かへ運んで行く。

〇同・滑走路を走るフォークリフト
　木箱を運び、フォークリフトが行く。
　運転しているのは作業員に化けたエメ
　リーナ。
　ひと気のない所まで来るとエメリーナ、
　誰に言うとでもなく話し掛ける。
エメリーナ「もう大丈夫よ」
　すると突然、木箱の蓋が開き、中から
　息苦しそうにコルネが顔を出し、叫ぶ。
コルネ「自動車会社の会長か！　俺は！」
　思わずニヤリとするエメリーナ。
エメリーナ「さすが！　キレのある渾身のツ
　ッコミ！　まだまだ腕は落ちてないわね」
　まんざらでもない顔のコルネ。
コルネ「そうかぁ・・」

〇同・空港出口
　多くの大型車に混じり、さり気なく小
　型トラックがゲートから出て来る。

〇小型トラック・内
　運送屋姿のエメリーナが運転している。
　隣には助手の格好をしたコルネ。

エメリーナ「どお？　上手く行ったでしょ？」
コルネ「ああ、上々だ」
エメリーナ「だけど、一つ気になるんだけど。寄りにも寄って、何でこの国へ？」

○国際空港を臨む大通り
広い道路を、空港から小型トラックが走り去って行く。
道路の上には大きな看板。
（ようこそ！　ロンガイア連邦へ）とロンガイア語で書かれてある。

○ナイトクラブ（夜）
妖艶な女性歌手がしっとりとジャズを歌い上げているナイトクラブ。
客席では多くの紳士淑女たちが食事や酒を楽しんでいる。
奥の席にはすっかりフォーマルな装いに身を包んだコルネとエメリーナの姿。
と、店長らしき白いタキシードの男が訝しげに二人の元にやって来る。
白いタキシードの男「いらっしゃいませ」
コルネ、ニヤリと笑い、男を見上げる。
コルネ「久しぶりだな」
白いタキシードの男、ソバーロ・ニハチ（４５）はバツの悪そうな顔付きでコルネを見つめている。
コルネ「随分盛況じゃねえか、えっ？　持ち逃げ野郎」
ニハチ「あ、あんたもだろ。この国でも大騒ぎになってるぞ。盗っ人大統領だと」
コルネ「そうかい。じゃ俺たちすっかり横領仲間って訳だな」
エメリーナ「・・・誰？」
コルネ「ああ、こいつはソバーロ・ニハチ。俺たちのマネージャーだった男だ」
エメリーナ「ブレッド・オア・ライスの？」
コルネ「ところがある時、売り上げをそっくり持ち逃げしてな。お陰で随分大変な思いをしたんだぞ、俺たち」

ニハチ「・・・」
コルネ「ここにいると知ったのは最近の事さ。
どうだ、まさかロンガイヤまで追い掛けて
来るとは思わなかったろ」
ニハチ「わ、悪いが、あの金は・・・」
コルネ、鼻で笑い飛ばし、
コルネ「フンッ、今さら返せとは言わねえよ。
ちょっと相談があって来たんだ」
ニハチ「相談？」
コルネ、ニハチにコソコソと話し出す。

○同・コルネのそばの席（夜）
全身黒ずくめの男がコルネらの様子を
さり気なく窺っている。

○モンジャナ宮殿・執務室（夜）
モンジャナがデスクで書類に目を通し
ていると、ノックの音。
モンジャナ「入れ」
鋭い目付きをした男が入って来る。
鋭い目の男「イワンです」
モンジャナ「おおミザールか、待っていたぞ」
鋭い目の男、ミザール・イワン（４２）
が静かに口を開く。
イワン「あの男の件ですね」
モンジャナ「流石だ、よく分かったな」
イワン「すでに監視の目を光らせております」
モンジャナ「そうか。よろしく頼むぞ」
イワン「は」

○ナイトクラブ（朝）
閑散とした店内。
椅子は皆テーブルの上に置かれている。
その一角で、如何にもオタク風の太っ
た中年男Ａが、パソコンのキーボード
を熱心に打ち込んでいる。
それを横から覗くコルネ、ニハチ、エ
メリーナ。
ふいに中年男Ａ、キーボードから手を
放し、悔しそうに呟く。

中年男Ａ「駄目だ、何重にもロックされてる」
コルネ「ロックだって？」
中年男Ａ「ああ、僕にはとても手に負えそうにない」
ニハチ「おい、頑張ってくれよ。お宅だけが頼りなんだから」
中年男Ａ「う～ん」
中年男Ａはただひたすらパソコンを睨み、唸っている。
コルネ、ニハチに目配せし隅に連れて行き、コソコソと話し掛ける。
コルネ「よお・・あれで三人目だぞ」
ニハチ「う～ん」
コルネ「お前まで唸ってどうする。裏社会には詳しい筈じゃなかったのか？」
ニハチ「何言ってんだよ。相手は国家だぞ。一筋縄に行く訳ないだろ」
コルネ「なんとか取り戻してくれよ、俺の金」
と、いつの間にかコルネの背後にエメリーナの姿。
彼女は呆れ顔で囁く。
エメリーナ「あなたのお金じゃないでしょ？」

○オープンカフェ（午後）
通りに面した席で、行き交う人々をぼんやりと眺め、コルネが休んでいる。
隣ではニハチが頻りにスマホを操作している。
コルネ、溜め息混じりに呟く。
コルネ「結局、五人目も駄目だったか」
ニハチ「心配するな。今、凄腕のハッカーと連絡を取ってる」
コルネ「ホント、大丈夫なのか？」
ニハチ「ああ、今度こそは保証するよ。ちと値は張るがな」
ふとコルネが訊ねる。
コルネ「しかしなんだな。お前、こんな所にたった一人で寂しくなかったのか？」
ニハチ「えっ？　いやぁ住めば都ってやつさ。いい所だぜロンガイヤも。・・・ただ」

コルネ「ただ？　何だよ」
ニハチ「トイレットペーパーだけは紙質が悪くてな、未だに馴染めないよ」
コルネ「ああっ、思い出した！（笑いながら）お前確か、ジヌシだったな」
ニハチ「嬉しそうに言うな！　そんな事より上手く行ったら謝礼の方は忘れるなよ」
コルネ「五％だったな」
ニハチ「えっ？　十％だろ？」
コルネ「ふざけた事抜かすんじゃねえ」
ニハチ「じゃ、七％」
コルネ「約束は五％だ」

○ナイトクラブ（午後）
コルネとニハチが帰って来ると、キーボードを打ち込む音がしている。
コルネ「おっ早いな。もう始めてるのか」
ニハチ「えっ？」
カウンターで、男がノートパソコンをスラスラと操作している。
隣でエメリーナが目を丸くして見つめている。
エメリーナ「ねえ、すっごいわよこの人」
振り返り、ニッコリと頭を下げる男。
そばの席でコルネをずっと監視していた黒ずくめの男、ケン・マハジ（３３）である。
マハジ「終わりました」
コルネ「なんだって！」
マハジ「新しい口座に、お金は全て振り込まれてますよ」
コルネ、走り寄り、食い入る様にノートパソコンを覗き込む。
コルネ「ホントだっ！」
コルネ、マハジをまじまじと見つめ、
コルネ「一体・・・どうやって？」
マハジ「いやなに、発想を変えただけです。入り口が開かないなら出口から侵入すればいいだけの話」
コルネ「何だか、よく分からんけど」

マハジ「まあこう言ってはなんですが、国家のセキュリティーなんて脆弱なもんですよ」
コルネ「へええ～！　やっぱ凄腕のハッカーは言う事が違うな」
コルネ、感嘆の声を上げ、ニハチに目を向ける。
なぜかニハチはポカンとしている。
ニハチ「お宅・・、誰？」
コルネ「誰って、さっき連絡してた奴じゃ」
マハジ「僕、ケン・マハジといいます」
ニハチ「・・・」
マハジ、怪訝そうに見つめるニハチに笑顔で話し掛ける。
マハジ「嫌だなニハチさん、ここの常連じゃないですか」
ニハチ「そ、そうだっけ？　あ、ああ。そうだったな」
そう言いつつニハチ、ふとパソコンに目を落とし、ギョッとする。
ニハチ「ああっ！　こ、これは・・・」
ニハチ、モニターを凝視し、
ニハチ「一、十、百、千、万・・・、な、な、なんなんだ！　この金額は」
コルネ「なんなんだ、って、今年度の軍事費だよ。ＧＤＰの三％だ。お前だって知ってるだろ」
ニハチ「いや、分かってはいたが・・、いざこんな額を目の前にすると」
コルネ「いいな。取り分はその五％だからな」
ニハチ、わなわなと震え出す。
コルネ「なんだよ。まだグズグズ文句が言いたいのか？」
ニハチ「だ、駄目だ。俺には怖くて、とてもこんな大金・・・受け取れん」
コルネ「ああ？・・・なんだって？」
ニハチ「俺は・・・、辞退させて貰う」
コルネ「なーにビビってんだよ。気の小せえ野郎だな、たかが国家予算くらいで」
高らかに笑うコルネ。
エメリーナが呆れ顔で口を挟む。

エメリーナ「その点、あなたは相当図々しく出来てるわよね」
コルネ「当たり前だ。これ位図太くなきゃな、大統領なんてやってらんねんだよ！」

○スーパーマーケット（夕）
エメリーナが鼻歌交じりで買い物をしている。
その後ろをコルネがカートを押しながら付いて来る。
なぜかマハジも一緒にいる。
エメリーナ「ええと、やっぱこの国に来たらキャビアよね。あ、それからフォアグラも。そうそう、メロンも買わなくちゃ」
エメリーナ、どんどんカートに入れて行く。
コルネ、呆れ気味に呟く。
コルネ「まったく、ひとの金だと思って」
鼻歌混じりに答えるエメリーナ。
エメリーナ「あっなたのおっカネじゃな～いでしょ～」
マハジはニコニコしながら隣を歩いている。
コルネ、ふと思い出したようにマハジに声を掛ける。
コルネ「あ、そうだ。あんたに礼をしなくちゃいけねえな」
マハジ「ああ、僕ならいいりません」
コルネ「ええっ？　あんた！　仏様か！」
マハジ「いいえ違います。御仏などではありません。僕はただコルネさんのお役に立てるだけで嬉しいんです」
コルネ「やっぱ仏様じゃねえか」
マハジ「いえいえ。実は、大ファンだったんですよ、ブレライの」
コルネ「ブレライの？」
マハジ「ええ」
コルネ「ブレライの？」
マハジ「ブレライが・・・、何か？」
コルネ、ふいに満面の笑みを浮かべ、

コルネ「いやあ通だねえ！　まさかこの国でブレッド・オア・ライスの事をそう呼ぶ人に会うとは思わなかったよ」
マハジ「子供の頃、テレビでよく見てました」
コルネ「こんな独裁国家でもやってたの？　俺達のお笑い。よっぽど娯楽がないんだな」
マハジ「出来れば、また復活してほしいです」
　急にコルネの笑顔が消える。
コルネ「ああ、そりゃちょっと無理かな」

○ナイトクラブ（夕）
　買い物袋を抱えコルネらが帰って来る。なぜか店内は騒然とし、従業員らが慌ただしく走り回っている。
エメリーナ「どうしたのかしら？　まだ開店前だってのに」
　コルネ、フロアマネージャーを捉まえ問い質す。
コルネ「おい！　どうしたんだ！」
フロアマネージャー「ニハチ店長が姿をくらませたんです！　店の金持って」
エメリーナ「えっ？　また？」
コルネ「・・店のって、自分の金だろ？・・何考えてんだ、あいつ」
　マハジが小声でコルネに話し掛ける。
マハジ「コルネさん、もうここに長居しない方がいいですよ」
コルネ「・・・どうやら、そのようだな」
エメリーナ「だけど、一体どこへ行くっていうのよ」
コルネ「（困惑顔で）・・・だよな」
　と、微笑みを湛え、マハジが口を開く。
マハジ「それなら、僕の所に来ませんか？」
　コルネ、まじまじとマハジを見つめ、
コルネ「僕の所って・・、そう言えばあんた、一体何者なんだ？」
　マハジ、急に真顔で、
マハジ「私は・・・、ＫＩＡの者です」
　ギョッと眼を剥くコルネとエメリーナ。
コルネ・エメリーナ「けっ！　ＫＩＡ？」

○ＫＩＡ倉庫群（夜）
広大な敷地に建ち並ぶ巨大倉庫群。
それらを背にし、マハジが語る。
マハジ「ケン・インターナショナル・アソシエーション。略してＫＩＡ。この国有数の貿易会社です」
コルネとエメリーナ、呆然と倉庫を見上げている。
コルネ「なんだ脅かすなよ。俺はまた、もの凄くおっかない国家の組織かと思ったぞ」
エメリーナ「そうよ。私、いい歳しておしっこチビりそうになっちゃったんだから」
マハジ「いやあ、そんなんじゃありませんよ。僕が起こした会社です。でも今は引退して毎日ブラブラ遊んでますけどね」
コルネ「道理で金なんかいらねえって言う訳だな」
エメリーナ「悠々自適なのね」
コルネ「にしても、その若さで引退だなんて、俺がアンタくらいの時はまだ売れない芸人で毎日ヒーヒー言ってたのに・・」

○同・古びた倉庫（夜）
空っぽの古い倉庫。
鉄骨は錆び、所々壁が落ちている。
マハジがコルネとエメリーナを案内している。
マハジ「この倉庫は現在使ってないので、誰の目にも留まる事はないと思います」
コルネ、キョロキョロと辺りを見回し、
コルネ「なんか・・、すげえ所だな」
マハジ、隅にある地下へ行く階段を下り始める。

○同・地下室。（夜）
薄暗い中、マハジとコルネ、エメリーナがコツコツと音を立て鉄骨の階段を下りて来る。
目の前にワインセラーが広がっている。

マハジ「地下はワイン貯蔵庫になっていて、実はその奥に、核シェルターが設置されているんですよ」
コルネ「核シェルター？」
マハジ、ワインセラーの奥を指差す。
何やら埃まみれの扉が見える。
エメリーナ「核シェルターって・・・、世界の終末に備える為の？」
マハジ「ええ、この国の富豪ならみんな持ってます。いつなんどき何が起こるか分かりませんからね」
呆然と奥の扉を見つめるコルネとエメリーナ。
マハジ「そうぞ、あそこをご自由にお使いになって結構ですので」
コルネ「そ、そうか、わりぃな」
エメリーナ「あ、有難う。何から何まで」
マハジ「いえ、・・・では僕はここで」
ニッコリ笑い、マハジは去って行く。
後に取り残されたコルネとエメリーナ、戸惑いつつ扉へと向かう。

○同・シェルター内（夜）
外見と打って変わり、豪華な室内。
高い天井、壁には数々の名画が飾られ、大画面テレビに、バーカウンターまで備え付けられている。
十人は座れそうなソファーにポツンと腰掛けながら、コルネとエメリーナが目を丸くしている。
コルネ「なんだい、シェルターって言うから防空壕みたいなのを想像してたけど、うちの官邸よりずっと豪華だぞ」
エメリーナ「正にブルジョアの邸宅ね」
ふいにエメリーナ、声を潜め、
エメリーナ「ねえっ、そんな事より、大丈夫なの？　あの人」
コルネ「さっき、ここへ来る途中、スマホでこっそり人物名鑑を調べてみたんだが」
エメリーナ「ああ、官邸で使ってる？」

コルネ「そう、大統領専用のやつさ。確かにケン・マハジという名はあった。写真を見たら間違いなくあの男だ」
エメリーナ「じゃあ、本当に」
コルネ「ああ、ケン・インターナショナル・アソシエーションの元ＣＥＯだ」
エメリーナ「そうなんだ」
コルネ「それだけじゃねえ。どうやらあの男、現政権に不満を持っているらしく、財力を武器に政界進出を目論んでいるって噂だぞ。モンジャナにとっては目の上のたん瘤ってところだな。我々の味方をしてくれるのも頷ける話だ」
エメリーナ、疑惑の目付きで、
エメリーナ「でもそれって、あくまで我が国の調査でしょ？　大統領補佐官として言わせて貰いますけどね。ソダベナの情報収集能力は国際的には最低ランクよ」
愕然とするコルネ。
コルネ「・・・そうなの？」
エメリーナ「呆れた。大統領の癖にそんな事も知らなかったの？　ソダベナはね、外国から見たら物凄くチョロいおめでたい国家なのよ」
更に愕然とするコルネ。
コルネ「い、いやしかし、心配するな。あいつ、俺の大ファンだって言ってた。よもや俺たちを売るような真似なんか・・」
エメリーナ、突然蔑んだ目でコルネを見つめ、吐き捨てるように言う。
エメリーナ「あなたって、昔っからそうよね」
コルネ「なにが」
エメリーナ「ファンだって言われると、急にデレデレしちゃってさ」
コルネ「んなこたぁねえよ」
エメリーナ「あの時だってそうだった。あなたがこっそり付き合ってたあの女。最初はファンだなんて言って近づいて来て」
コルネ「ああ、その話はもうよせ」

○モンジャナ宮殿・レセプションホール（夜）
天井までびっしりと壁画で埋め尽くされた豪華なホール。
その中央にポツンと置かれたリングで、赤と青のヘッドギアを付けた二人の男がボクシングをしている。
青いギアの男をコーナーへ追い詰め、圧倒している赤いギアの男。
と、イワンが入って来る。
ふいに手を止める赤いギアの男。
同時に崩れ落ちる青いギアの男
イワン「閣下」
赤い方が振り向き、ヘッドギアを取る。
モンジャナである。
彼は息も切らさずイワンに訊ねる。
モンジャナ「どうだ、あの男に動きはあるか」
イワン「いえ、今の所は全く」
モンジャナ「監視を続けてくれ」
イワン、軽く頭を下げ、
イワン「閣下。ご命令通り生粋の精鋭たちを揃えました」
モンジャナ「おお、そうか」
振り返りイワン、声を掛ける。
イワン「入れ！」
ホールにぞろぞろと様々な職種の人々が入って来る。
床屋の亭主、八百屋のおやじ、保険のセールスレディ、コンビニ店員、宅配ドライバー、植木屋、掃除婦。
皆、肩から銃を下げている。
モンジャナ、彼らを見てニヤリと笑う。

○古びた倉庫（朝）
穏やかな朝日がガラスの割れた窓から差し込んでいる。

○同・シェルター内（朝）
オーディオから流れる軽音楽。
ソファーに腰掛け、コルネとエメリーナが無心でメロンにかぶり付いている。

エメリーナ「ねえ・・・前から聞きたかったんだけどさ」
コルネ「何を？」
エメリーナ「そもそもなんで戦う前から降伏なんてしちゃったのよ」
コルネ「・・・」
エメリーナ「少しは抵抗する姿勢くらい見せたってよかったんじゃないの？」
コルネ「・・・」
エメリーナ「お陰ですっかり卑怯者の烙印を押されちゃったじゃない」
コルネ「何言ってんだ。卑怯者はモンジャナの方だろ」
エメリーナ「なんで？」
コルネ「だってそうじゃねえか。相手は戦争ばっかりやってる大国だぞ。言ってみりゃ力士が素人相手に相撲を取るようなもんだ。どう考えたって対等な勝負じゃねえ」
エメリーナ「・・・」
コルネ「俺はな、挑発に乗せられ同じ土俵に上がりたくなかっただけだ」
エメリーナ「そっ、立派な心掛けですこと」
コルネ「だいたい相撲取りなら大関に挑んで行けよ。横綱を目指せってんだよ」
エメリーナ「分かるけど、でも国民の賛同は全く得られてないわよね」
コルネ「いやそんな事・・・」
思わずため息を吐くコルネ。
コルネ「だよな。なんたって支持率マイナス三十％だもんな」
突然マハジの声。
マハジ（声）「いえ、マイナス百％です」
コルネ、ハッと振り返る。
パンとワインを手にしたマハジが扉の前に立っている。
マハジ「最新の世論調査です」
コルネ「・・・マジかよ」
マハジ「もうあなたの信頼は地獄の底に落ちてしまいました」
コルネ、呆然として呟く。

コルネ「地獄の底なの？　・・・俺」
マハジ、にこやかにパンとワインを差し出し、
マハジ「どうですか？焼き立てのパンとこの国自慢のワインでも」
エメリーナ「えっ、あ、ありがとう」
マハジ「なんと言っても地元の食べ物が一番おいしいと僕は思うんですけど」
コルネ、メロンを繁々と見つめ、しみじみと口を開く。
コルネ「流石だな。あんた本物のブルジョアだよ。メロンなんかでハシャいでる俺たちとは格が違うわ」
マハジ「いやあ、そんな事はありませんよ。僕はあなたを凄く尊敬してるんです」
コルネ「俺を？　キレのある渾身のツッコミをか？」
マハジ「それはもちろんですが、何よりも大統領としてです」
コルネ「またぁ」
マハジ「あなたには勇気がある」
コルネ「俺に？　勇気が？」
マハジ「スパッとアッサリ降伏しました。正にあれは、キレのある渾身の決断ですよ」
コルネ「なんだよ、スパッだのアッサリだの」
マハジ「あんな切迫した状況で、周囲の声を全く無視し、無謀としか言えない全面降伏を選択するなんて、最早これはもう勇気がなければ出来る事ではありません」
コルネ「それ・・、褒めてないと思うな」
マハジ「ですが、僕は正直、本当に世論調査が正しいとは、どうしても思えないんです。どう見てもあれは、建て前の意見です」
コルネ「そうか？」
マハジ「マスコミだって、戦わない大統領を糾弾するデモが、まるで国民全体の声みたいな伝え方をしてるし」
コルネ「だよな。ヒドいよな、あいつら」
マハジ「本音は、たとえ占領されても家族を戦場に送り出さなくて済んでホッとしてい

る人は沢山いると思いますよ。だけど、みんなそんな態度はおくびにも出せない。周りの目を気にすると決して口には出来ない。実はそれが一番戦争の恐ろしい所だと、僕は思ってるんです」

コルネ「・・・」

マハジ「大体どこの国の政治家も、二言目には他所の国が攻めて来たらどうするとか言って国民を煽り、まるで国その物が押し寄せて来るような言い方をしますが、そんな事ある訳ないじゃないですか。攻めて来るのはその国の支配者に命令された何の罪もない一般人です。そもそも国家など人間がでっち上げた単なる概念なんだから、国が変わろうが体制が変わろうが、世界なんてなん～にも変わりはしませんよ」

コルネ「国が、概念？」

マハジ「ええ、そうです。その証拠に犬や猫が国境を気にしますか？」

コルネ「・・・」

マハジ「言い換えれば国家なんて大きな会社みたいなもんです。だとすると国民は只の社員じゃないですか。辞めるのだって自由な筈です。殺し合いまでする義務なんて、どこにもありはしません。なのに政治家がやたら戦争に駆り立てるのは、他でもない、自分達の既得権益が危うくなるからですよ」

コルネ「確かに・・・、そうかも」

マハジ「考えてもみてください、所詮上に立つ人間なんて数少ない例外を除き、みんな人を将棋の駒くらいにしか思ってない性根の腐った連中ばかりだと思いませんか？」

コルネ「性根の腐った？　・・・つ、つまり、国に俺みたいな指導者は必要ないって事？」

マハジ「それどころか国家を持った事自体、人間の犯した最大の過ちだと僕は思ってるんですけどね。猿のままでよかったんだ、人類なんて」

コルネ「猿のままで？」

マハジ「ええ」

コルネ「だけど、その猿だってしょっちゅう
諍いを起こしてる気がするけど」
マハジ「でも、猿の喧嘩程度なら大した害も
ない」
　コルネ、フッとため息を吐く。
コルネ「・・・言えてるな。ああ俺は猿にも
劣る大統領だったのか・・」
　と、大きく首を振るマハジ。
マハジ「いえ、あなたは敢えて汚名を着せら
れてまでも口に出来ない人々の本音を一人
で背負いました。確かに表向きは支持率マ
イナス百%かも知れませんが、実はあなた
は声なき声に支えられた立派なボス猿だと、
僕はそう思ってます」
コルネ「えっ？・・・」
　マハジを見るコルネの目が見る見る輝
き出す。
コルネ「そうか！　立派なボス猿か！　俺は。
偉い！　よくぞ言ってくれました！」
　エメリーナは冷ややかな目でコルネを
見ている。
マハジ「あなたは数少ない本物の大統領です。
例え逃げ隠れしようとも、例え国家の財産
を横領しようとも、性根だけは・・腐って
ません！」
コルネ「だけ？・・」
　コルネの目から急に輝きが消える。
コルネ「あ、あのな」
　そして憮然として言い放つ、
コルネ「俺だってな、ただ逃げ回ってる訳じ
ゃねえ、私腹を肥やしてる訳じゃねえ！」
エメリーナ「へえ～、そうだったの？」
コルネ「ああ、ちゃんと考えてんだ！　モン
ジャナにどうやって反撃してやろうかと。
連日連夜、徹頭徹尾」
エメリーナ「あらま、知らなかったわぁ」
　コルネ、拳を振り上げ、
コルネ「見てろ！　あの野郎、コルネ様を怒
らせたらどうなるか、今に思い知らせてや
るぜ！」

○モンジャナ宮殿・バンケットルーム（夜）
ロココ調の豪華な長テーブルでポツンと一人、モンジャナが食事をしている。足元では猫が銀の食器に盛られたメロンに噛り付いている。
ふいにドアが開き、あたふたとアリナン首相が入って来る。
アリナン「お食事中、失礼いたします」
モンジャナ「なんだ、どうかしたのか？」
アリナン「閣下、ちょっと困った事が起きまして」
モンジャナ「なんなのだ？」
アリナン「どこぞの誰かが、知らぬ間にロンガイアを商標登録いたしました」
モンジャナ「それがどうしたと言うのだ？」
アリナン「今後、ソダベナ国内でロンガイア連邦を名乗る場合、使用料を支払わなくてはならなくなったのです」
モンジャナ「使用料だと？自分の国を名乗るのに金が要るのか？」
アリナン「ええ」
モンジャナ「そんなバカな法律があるか」
アリナン「国際的に厳格なルールです」
モンジャナ「いくらだ」
モンジャナ、食事の手を止め、アリナン、メモを取り出す。
アリナン「ええと、現在の為替レートで計算しますと、ソダベナの通貨で九八万ネギー、ヘバダス国の通貨ならば九七万ギューターン、ラーズラ国の通貨ですと九九万チャッキリ、ダギャー国の通貨の場合九六万ウィローになります」
モンジャナ「高いな。ロンガイア連邦の通貨、アブクーは？」
アリナン「受け付けないそうです」
モンジャナ「なら名乗らなければいいだけの話だ。ソダベナの事はロンガイア占領国とでも呼んでおけ」
アリナン「それも登録されています」

モンジャナ「ではロンガイア支配国は？」
アリナン「それもすでに」
モンジャナ「・・・」
アリナン「その他にもロンガイア属国、ロンガイア衛星国、ロンガイア子分国、ロンガイア連邦ソダベナ支店等、思い付く限り、ありとあらゆる名称がすでに登録されております」
モンジャナ「・・・」
アリナン「それだけではありません。寄りにも寄って、閣下のお名前を冠したスナック菓子」
モンジャナ「私の名だと？」
アリナン「モンジャナチップスと言う物までございました」
モンジャナ「ううぬ、それは一体何味なのだ」

〇核シェルター内

ソファーにどっかと座り、コルネが腹を抱え笑っている。
コルネ「どうだ！　ざまあ見ろってんだ！
モンジャナめ」
エメリーナはバーカウンターから冷めた目でジッとコルネを見つめている。
コルネ「もう俺の国で気軽にロンガイア連邦なんて名乗らせねえぜ！」
コルネは一人、ゲラゲラと笑っている。
エメリーナがポツリと口を開く。
エメリーナ「でも・・、現実は何も変わってないわよね」
コルネ「いやでも、気分だけでも違うだろ」
エメリーナ「占領されてる事には変わりはないわ」
コルネ「変わりはねえけど、占領されてない感はグッとアップしただろが！　あれっ？　ソダベナってまだロンガイアじゃなかったんだっけ？　てな雰囲気でな。そもそも国なんて単なる概念だ！　バカやろ」
エメリーナ、呆れ顔で言い放つ。
エメリーナ「やる事が小さいわね」

コルネ「なんだって？」
エメリーナ「あんたって、ホント小さい男だって言ってんのよ」
コルネ「・・・」
コルネ、突然黙り込んでしまう。そしてしばらく空を見つめ、寂しそうに口を開く。
コルネ「・・だよな。何も変わってねえよな」
エメリーナ「商標登録だって、訴えられて撤廃されるのも時間の問題よ」
コルネ「・・・だな」
コルネ、大きくため息を吐き呟く。
コルネ「やっぱ、たった二人じゃ、やれる事なんてたかが知れてるか。せめてもう一人、助っ人がいたらなあ」
エメリーナ「助っ人？」
コルネ「ああ、それもただの助っ人じゃ駄目だ。俺の言う事を何でもハイハイと聞いてくれるような奴じゃねえとな」
エメリーナ「言う事を？　・・・何でもハイハイと？　・・・操り人形みたいに？」

× × ×

ソファーの隅っこにムッシュ・ドリアがむっつりと黙り、座っている。
その反対側の隅には、憮然とした顔でコルネが座っている。
二人とも目も合わさず、ひたすら空を睨んでいる。
バーカウンターからジッと見つめていたエメリーナ、溜らず口を開く。
エメリーナ「二人共、いい加減口を利いたらどう？」
だがコルネとドリアは聞く耳も持たず、ソッポを向いたまま。
と、軽く響くノックの音。
マハジが入って来る。
マハジ、コルネとドリアを見た途端、目を輝かせ、声を上げる。
マハジ「ああっ！　ブレッド・オア・ライスだっ！」

思わずハッとマハジに目を向けるコルネとドリア。
マハジが嬉しそうに叫ぶ。
マハジ「このシチュエーションは・・、ひょっとして、分かり合えない親子！」
一瞬、戸惑いの表情を見せる二人。
お互い顔を見合わせ、唐突にドリアが口を開く。
ドリア「どうしても行きたくないのか・・。父さん心配してんだぞ」
コルネも喋り出す。
コルネ「ああ。俺はもうあんな所二度と嫌だ」
なぜか始まる二人のコント。
ドリア「組のもんと上手く行ってないのか」
コルネ「クラスメートって言えよ！　俺はまだ高校生だぞ」
ドリア「嘘！　ちょっと無理があるだろ？」
コルネ「どう見たって立派な高校生だろが！」
ドリア「そうか。俺はまた出入りが嫌で」
コルネ「出入りって言うな！　友達と喧嘩しただけだよ」
ドリア「ドス持って？」
コルネ「持つか！　そんなもん！」
マハジは手を叩き笑っている。
涙まで流している。
コルネ、ふとマハジに目をやり、
コルネ「そんな・・・泣く程の事か？」
マハジ「いやあ最高です！　まさかまた伝説のコントを見れるとは思いませんでした」
コルネ「伝説だなんて、大袈裟な」
コルネ、思わず照れ笑い。
ドリアも嬉しそうに笑っている。
お互い笑い合い、二人の間に和やかな空気が流れる。
が、ふいにコルネ、ドリアに言い寄る。
コルネ「それはそうと、お前嘘ついたろ」
ドリア「えっ？　何が・・」
コルネ「ただハイハイと言う事を聞いてただけだなんて言いやがって。ネタ書いてたの、お前じゃねえか」

○ソダベナ国・とあるホテル
頻りにロンガイア兵が出入りしている
豪華なホテル。

○同・ロビー
中にいるのは全てロンガイア兵。
お茶を飲む者、ソファーで新聞を読む
者など、ロビーはのんびり寛ぐ多くの
兵で溢れている。
と、入り口に止まる一台の乗用車。
中から床屋の亭主が降り、どこかへと
去って行く。
直後、大爆発を起こす車。
ホテルの壁は破壊され、爆風で多くの
ロンガイア兵が吹き飛ばされる。

○核シェルター内
静かな室内。
エメリーナはソファーに寝転がり、ス
マホを眺めている。
ドリアはカウンターでワインを楽しん
でいる。
ふいに慌ただしく響くノックの音。
血相を変えマハジが入って来る。
マハジ「皆さん、大変な事が起きました！」
マハジ、キョロキョロ辺りを見回し、
マハジ「あれ？コルネさんは？」
ドリア「キジ撃ち」
マハジ「こんな街中で？」
ドリア、その場でしゃがんで見せる。
マハジ「ああ、失礼しました。とにかくテレ
ビを見てください」
マハジ、リモコンを手に取りテレビの
スイッチを入れる。
料理番組をやっている。
急ぎチャンネルを変えるマハジ。
セクシーな女が悪人をやっつけている。
マハジ「あれ？　どこもニュースをやってな
いのかな？」

水が流れる音と共にブツブツ言いながらトイレからコルネが出て来る。
コルネ「ニハチの言った通りだ。質が悪いなこの国のトイレットペーパーは・・・」
コルネ、マハジがいる事に気が付く。
コルネ「やあ、いらっしゃい」
テレビを睨みながら答えるマハジ。
マハジ「そんな呑気に挨拶なんかしてる場合じゃありませんよコルネさん。えらい事になってるんですから」
コルネ「あら、そうなの？」
アニメ、カラオケ道場、通販番組と、テレビ画面が切り替わって行く。
コルネ「だけどマハジ、こんな豪華なシェルターを誂えておいて、何で洗浄便座を付けなかったんだ？」
マハジ、ひたすらリモコンを操作しながら、
マハジ「付けるも何も・・・、ありませんよ、洗浄便座なんてこの国には」
コルネ「ええっ？　ないの？　こんな大国なのに？」
マハジ「戦争ばっかやってる国に、そんな余裕なんてある訳ないじゃないですか」
コルネ「知らなかった。俺はまたあんないい物、世界中に普及しているのかと」
マハジ「尻を洗うなんていう細やかな発想は、平和だからこそ生まれて来るものだと思いませんか？」
コルネ「そういうもんなのかねえ」
マハジ、忙しくチャンネルを変え、
マハジ「もう！　こういう場面じゃ映画なら必ず都合よくニュースをやってるんだけどなあ」
と、ふいに画面に現れるロンガイアの厳つい女性アナウンサーC。
マハジ「ああ・・、やっと出て来た」
〇同・テレビ画面
女性アナC「ソダベナで騒乱が起きています。

昨日未明、突如モッツーニ市街にあるホテルが爆破され、我がロンガイア軍はソダベナ市民による襲撃を受けました。その時の映像です」
画面は騒然とする市街地に切り替わる。逃げ惑うロンガイア兵に向け、床屋の亭主、八百屋のおやじが容赦なく銃撃をしている。
保険のセールスレディは手榴弾を投げ、コンビニ店員、宅配ドライバーは後方で物資の補給をし、植木屋はバズーカで街路樹を吹き飛ばし、掃除婦は火炎放射器で辺りを一掃している。

○同・シェルター内
マハジ、愕然とテレビを見つめている。と、ふいにコルネが笑い出す。
ドリアとエメリーナも笑っている。
ポカンとして訊ねるマハジ。
マハジ「どうしたんですか？」
コルネ「どうしたって・・・、なんなんだ？この茶番劇は」
マハジ「・・・茶番劇？」
ドリア「これ・・、やらせだよ」
マハジ「・・・やらせ？」
コルネ「見てみなよ。映像はロンガイア兵を攻撃する市民らの後ろから撮ってるだろ？」
エメリーナ「そこにはカメラマンやら、音声さんやら、ひょっとしてディレクターまでいるのよ」
マハジ「・・・は？」
コルネ「何で・・ロンガイアの報道陣が敵側に混じって取材出来るんだ？」
マハジ「じゃ、あの襲撃しているソダベナ市民ってのは？」
ドリア「全員仕込み、多分ロンガイア兵だろ」
マハジ、ようやく理解した顔になり、
マハジ「あ・・・、あ～あ、なるほど・・・。よく見抜きましたね」
コルネ「当たり前だ。俺たち何年バラエティ

で食って来たと思ってんだ」
エメリーナ「しかもみんな、さも民間人ですって言いたげに仕事着のまま襲撃してるし。普通着替えるでしょ、戦闘服とか迷彩服に」
マハジ「ああ、そう言えばそうですよね」
コルネ「こんなニュース信じるバカ、誰もいやしねえよ」
ドリア「少なくとも、テレビずれした俺たちの国じゃな」
マハジ「そうだったんですか。じゃああれ、画面のこっち側にはカメラマンとか、音声さんとか、ディレクターがいて、よーい、スタート！　とか言ってるんですね」
マハジも一緒に笑い出す。

〇モンジャナ宮殿・執務室
執務室に撮影スタッフが集結している。カメラマンBは機材を構え、音声Bはマイクを向け、その横でディレクターBが指示を出している。
ディレクターB「では閣下、本番参ります。よーい・・・」
ディレクターB、掌でキューを出す。猫を抱きながらゆったりとソファーに腰掛けたモンジャナがカメラ目線で語り出す。
モンジャナ「親愛なるソダベナの諸君。君たちには失望した。例えるなら君らは青信号になってもスマホを弄りいつまでも車を発車させない無神経ドライバーである。スコップを持ちながら散歩中の愛犬の糞を片付けない無作法飼い主である。総菜コーナーに刺身パックを戻す非常識買い物客である。いずれにせよ、我々の我慢の限界を越えるクズ野郎の集まりである事だけは、今回の我が軍への卑劣な奇襲でよく理解した。従ってロンガイア連邦は軍備を増強し、新たな兵を君たちの国へプレゼントする事を約束する。第二次ソダベナ侵攻の火蓋はたった今、切って落とされた」

○核シェルター内
呆然とテレビを見つめているコルネ、ドリア、エメリーナ、マハジ。
画面には満足げに笑うモンジャナの姿。
ドリアがポツリと言う。
ドリア「ちょっと何言ってるのか、よく分からなかったけど・・・」
エメリーナもしみじみと呟く。
エメリーナ「また、攻めて来る・・、という事だけは確かなようね」
コルネがイライラと吐き捨てる。
コルネ「やらせがバレバレだとか、そんなのハナっから気にするつもりはねえんだな」
ジッと画面を睨み、マハジがボソッと口を開く。
マハジ「だけど、今度はもう、前回のようには行きませんよ。モンジャナはきっと・・、ソダベナを破壊し尽くす気でいるでしょう」

○都会の街角
大勢の人々が不安そうにディスプレイを見上げている。

○同・ディスプレイ画面
アナAがニュースを伝えている。
アナA「ニュースをお伝えします。ロンガイア軍が再び侵攻を開始しました。国境付近には前回を上回る兵が集結し、続々と我が国への進軍を開始しました」
モッツーニ市街を進軍する大勢のロンガイア兵のモニター映像をバックに、アナAは伝える。
アナA「これに対し我が国政府では、大統領不在のまま緊急議会が招集され、現在対策が検討されています」

○ソダベナ議事堂・議場
閣僚らの採決が行われている。
議長が結果を読み上げる。

議長「マッジ・ウケルス文化長官、賛成。トッド・ケール運輸長官、賛成。ローカーニ・タットーレ教育長官、賛成。よって満場一致で、特別国債発行による新たな軍事費捻出法案は可決されました！」

大きな拍手に包まれる議場。

立ち上がり、深々とお辞儀をするゴバク・バーン。

議長が声を上げる。

議長「以上で臨時議会を閉会いたします！」

〇ソダベナ某テレビ局・スタジオ

ベシャール・デマーがカメラに向かい深刻な顔で訴え掛けている。

デマーの背後には「対ロンガイア戦争、ついに始まる！」のテロップ。

デマー「視聴者の皆さん、今度ばかりは覚悟を決めてください。最早戦争は避けられません」

〇核シェルター内（夜）

エメリーナがテレビのリモコンを手に、ドリアに声を掛ける。

エメリーナ「見て、ベシャール・デマーよ」

ドリア「ここ敵国だろ？　何でも映るんだな、マハジのテレビは」

画面にはデマーの姿。

デマー（画面）「私はすでに腹を括りました。こうなったらソダベナ国民の一人として、最後の最後まで私もロンガイアに立ち向かいます！」

ドリア、思わず薄笑いを浮かべ、ドリア「賭けてもいい。こいつ絶対真っ先に逃げるぜ」

エメリーナ「だけど、結局こうなってしまうなんて・・、なんか、悲しいわね」

ドリア「まあ・・、仕方ないさ」

ドリア、デスクにいるコルネに向かい、ドリア「俺たちもそろそろ逃げる準備をしといた方がいいかもな」

コルネは黙々とパソコンに向かい、何やら操作をしている。
ドリア「折角俺を呼んだのに、何の役も立たなかったな」
パソコンをジッと睨んだまま、コルネは答える。
コルネ「いや・・・、お前にはこれから役に立ってもらうさ」
ドリア「・・・どういう事？」
コルネ「要するに、もう逃げねえって事だよ」
エメリーナが訝しげに訊ねる。
エメリーナ「何やってるの？　さっきから」
コルネ「ちょっと待て。もうすぐ終わるから」
コルネ、パソコンのキーボードをトンと押し、
コルネ「よしっ、これでいい」
コルネ、くるりと二人に椅子を向け、ニヤリと笑う。
コルネ「実はな、とびきりの作戦を思い付いたんだ」
ドリア・エメリーナ「とびきり？」
と、ノックの音。
コルネ「どうぞ！」
マハジが忙しく入って来る。
マハジ「コルネさん、準備は整いました！
我が社も総力を挙げて協力させて頂きます」
コルネ「おお、そうか！　ありがとう！」
ポカンとしてコルネを見つめるドリアとエメリーナ。
ドリア「何を始める気なんだ？　お前」
コルネは笑っている。
コルネ「いやね・・・、攻め込まれる前に、こっちから攻め込んでやろうと思ってさ、ロンガイア連邦全土に」
エメリーナ「全土に？」
ドリア「正気か！　お前」
エメリーナ「一体、どうやって攻め込むつもりなのよ？」
コルネはニコニコ笑っている。
ドリア「まさか、正面から突っ込む気じゃ」

コルネ「いやいや」
エメリーナ「それとも、横からとか？」
コルネ「そうじゃない」
ドリア「ひょっとして、上から？」
コルネ「ブゥーーー！　残念ーっ」
　コルネ、満面の笑みを浮かべ、
コルネ「下から、だよ」
ドリア・エメリーナ「・・・下から？」

○ＫＩＡ倉庫群（早朝）
　敷地内に続々と入って来るトラック。

○同・古びた倉庫前（早朝）
　前の通路にはトラックが列を成し停車している。

○同・古びた倉庫内（早朝）
　フォークリフトで下ろされ、次々と中に運び込まれて来る段ボール箱。
　コルネはあれこれとリフトの運転手に指示を出している。
　倉庫内にはすでにかなりの量の箱が積み上げられている。
　その様子を呆然と眺めていたドリアとエメリーナ、慌ててコルネを追い掛け問い質す。
ドリア「おい！　何の騒ぎだこれは！」
エメリーナ「一体、何を仕入れたの？」
コルネ「・・・」
　コルネ、箱の蓋を引きちぎる。
　中にはびっしりとトイレットペーパー詰まっている。
ドリア「トイレットペーパー？」
エメリーナ「どうしたの？　これ」
コルネ「ロンガイア中から買い占めてやったのさ。卸値の二倍で」
エメリーナ「やだ、もったいない」
ドリア「何でまた、そんな事を？」
　と、マハジが倉庫にやって来る。
　コルネ、嬉しそうに声を掛ける。

コルネ「やあマハジ。さすが流通業界の雄だ。
お陰ですんなり事が運んだよ」
マハジ「いえ、そんな大した事じゃ」
イライラするドリアとエメリーナ。
ドリア「おい！　ちゃんと答えろ！」
コルネ「ああ・・、そうだったな」
コルネ、ニヤニヤと笑い、
コルネ「いや、マハジがね、ロンガイアには
洗浄便座がないって言ったのがきっかけさ」
エメリーナ「だから・・、なんなのよ？」
コルネ「ああ。だから（トイレットペーパー
を手に取り）こいつが手に入らなくなった
ら、さぞやこの国の連中、困るだろ？」
エメリーナ「・・・」
コルネ「何しろ、唯一の手段を失ってしまう
んだからな」
エメリーナ「・・・」
深く頷き、ドリアが呟く。
ドリア「確かに・・・、戦争やってるどころ
じゃなくなるな」
コルネ「その通り！　まあ人間尻くらい拭か
なくても生きて行けるけどさ」
ドリア「ツッコめよ！　ボケて言ったんだよ」
コルネ「あらそうだったの？」
エメリーナ「でもコルネ、幾らなんだって国
中のトイレットペーパーを買い占めるなん
て無理に決まってるじゃない。毎日せっせ
と製造してるんだし」
コルネ「俺だってまさか全て買い尽くせると
は思ってねえ。一時的になくなるだけでい
いんだ。ロンガイアに不安が広がるだけで
充分」
マハジ「なるほど、さすがコルネさん」
コルネ「国内が政情不安になりゃ、きっとモ
ンジャナだってソダベナ侵攻を諦めざるを
得ねえさ」
エメリーナ、ジッとコルネを見つめ、
エメリーナ「それが・・、下から攻めるって
いう意味だったの」
コルネ「どうだ、完璧な作戦だろ？」

吐き捨てるようにドリアが言い放つ。
ドリア「バカかお前！　マジでそんな事上手く行くと思ってんのか！」
コルネ「大統領に向かってバカって言うな！そんなの、バカっていう奴がバカなんだぞ。お袋に言われなかったかバカ！」
ドリア「お前も言ってるじゃねえか」
コルネ「もうつべこべ言ってねえで、二人共出掛けるぞ」
ドリア・エメリーナ「どこへ？」
コルネ「港だよ」
ドリア・エメリーナ「港？」
コルネ「埠頭に海外製品が入港してるんだ。税関手続きにＫＩＡの重役のサインがいるらしい。マハジ、後は頼むよ」
マハジ「了解です」
コルネ、外に向かって歩きだす。
ドリアとエメリーナ、慌てて後を追い、
エメリーナ「ＫＩＡの重役って誰よ？」
コルネ「俺だよ」
ドリア「お前、いつの間に」

〇ロンガイア某港・貨物埠頭
ズラリとコンテナが並ぶ埠頭から一台の大型トレーラーが発車する。

〇湾岸道路
海の見える道路を走る大型トレーラー。

〇同・車内
エメリーナが運転し、助手席にコルネ、中央にはドリアが座っている。
ドリア、ブツブツとコルネに言う。
ドリア「それよりお前、金があるんだったら傭兵雇っちゃった方が手っ取り早いんじゃないのか？　世の中には幾らでもいるぜ、金で動く屈強なやつらが」
コルネ「あのな、俺は昔っからドンパチってヤツが大嫌いなんだよ」
ドリア「嫌いで済む問題じゃないだろ」

コルネ「それに傭兵なんて、戦況が悪化したら真っ先に見切りをつけて、結局最後まで戦わされるのは床屋の亭主とか八百屋のおやじとかコンビニの店員とかだ。みんな腹ん中じゃ海の底の貝になりてえって叫んでるぞ」

ドリア「民間人って意味か？」

コルネ「ああ、やらせでなく本物のな」

ドリア「しかし、それが戦争ってもんだろ？　国民が一斉に駆り出されるのが」

コルネ「考えてもみろ。敵も味方もお互い全く面識がねえんだぞ。知らねえ奴だからどうなってもいいって考えもあるかも知れねえが、逆に言えば憎しみも何もねえって事だろ？　普段なら道で会ったら、こんちわって挨拶してそのままずれ違う程度の間柄じゃねえか。それを何でわざわざ殺し合いまでしなきゃいけねんだ」

ドリア「だから、それが戦争ってもんだろ」

コルネ「自分と関わりのねえ人間を無駄に殺しに行くんだぞ。お前は殺人鬼に家族を殺されたからって、その殺人鬼の家族を殺しに行くか？　まず行かねえよな？　そんな事したって根本的な問題は全然解決しないからな。それとおんなじだよ」

ドリア「なに訳の分かんねえ事言ってんだ」

コルネ「要するに、無関係な人間同士で殺し合いをやってるうちにホントに国全体で仲が悪くなっちまうって話だよ。一旦国と国の仲が悪くなってみろ。もう容易に取り返しなんかつきゃしねえんだから」

エメリーナ、したり顔で呟く。

エメリーナ「あなた達が、いい例よね」

コルネ「大体そんな事をやらせる国の親玉も親玉だ。国家なんてせいぜい会社がでかくなったようなもんだろ。どこの世界に社員に命まで捧げろなんて言う会社があるよ。そんなのブラック企業もいいとこだ」

ドリア「国が会社だって？・・・誰がそんな」

エメリーナ、ふとドリアに目配せし、

エメリーナ「気を付けて。この人相当マハジにかぶれちゃってるみたいだから」
ドリア「あいつか！・・・震源地は」
コルネ、突然ムッとして、
コルネ「そうじゃねえ。これが俺の本筋だよ」
エメリーナ「へーえ・・、いつからそんな事考えるようになったのよ？」
コルネ、胸を張り言い放つ。
コルネ「大統領になった時からだ！」
思わず顔を見合わせるドリアとエメリーナ。
ドリア「しっかしなあ、トイレットペーパーがなくなったくらいでなあ・・」
エメリーナ「ねえ？　とっても戦争が止むとは思えな・・」
と、前方に道路脇に止まる三台の軍用車両が見えて来る。
エメリーナ「あら・・？　何かしら、あれ」

○湾岸道路
兵士らが一台一台通行車両を止め、積み荷を調べている。

○大型トレーラー・車内
コルネ、前方に目を凝らし、
コルネ「検問だ。まずいな・・。おい、そこを左に曲がれ」
エメリーナ「港に戻っちゃうわよ」
コルネ「ほとぼりが冷めるまで待とう」

○湾岸道路
軍用車両が停車する手前の丁字路を、ゆっくりと左折するトレーラー。

○大型トレーラー・車内
コルネ「どうだ？」
サイドミラーを確認するエメリーナ。
後をついて来る三台の軍用車が見える。
エメリーナ「駄目、ついて来ちゃったわ」
と同時に後ろから拡声器の声が響く。

拡声器の声「前を行く大型トレーラー。脇に寄せて止まりなさい！」
サイドミラーをチラ見しながらエメリーナが訊ねる。
エメリーナ「どうする？」
一瞬考え、コルネが答える。
コルネ「振り切れ」
言われるや否や、躊躇なくアクセルを踏み込むエメリーナ。

○湾岸道路
キュルキュルキュルと音を立て、煙を上げ高回転するタイヤ、トレーラーは急速にスピードを上げて行く。
慌てて軍用車も加速し追い掛けて来る。

○大型トレーラー・車内
サイドミラーには軍用車が見えている。
一台が脇からどんどん迫って来る。
それを確認するや否や、躊躇なく軍用車に向けハンドルを切るエメリーナ。

○湾岸道路
軍用車は大型トレーラーのコンテナに弾き飛ばされ横転、大破。

○大型トレーラー・車内
思わず目を丸くするコルネ。
コルネ「お～い、乱暴な事すんなよ、補佐官」
エメリーナ「うっさいわね、大統領」
すぐに背後から聞こえて来る銃声。
ガンガンガンッ、とコンテナから響く激しい着弾の音。
エメリーナ「ちっきしょう、撃って来たわ」
ドリアが呆れ顔で呟く。
ドリア「そりゃ、あんな事すりゃ撃たれるわ」
エメリーナ「どうしよう、追いつかれちゃう」
一瞬考え、コルネは答える。
コルネ「仕方がない。コンテナを切り離そう」
ドリア「ええっ？」

コルネ「切り離して・・、チョロQみたいになりゃ、逃げ切れるかも知れん」
コルネ、ドアを開け外へ向かう。
ドリア「マジかよ」
ドリア、渋々後を追う。

○同・車外
疾走する大型トレーラーの取っ手に掴まりコルネとドリア、ビクビク側面を渡って行く。
背後から響く銃声。
火花を散らしトレーラーに次々と弾痕が空いて行く。
二人はおっかなびっくり伏せながら、ようやく連結部へと辿り着く。
コルネ「よし、ここだ」
何気にドリアが訊ねる。
ドリア「ところでお前、切り離し方知ってるのか？」
コルネ「ああ？　こんな所に乗るのさえ初めてなのに、知る訳ねえだろ」
ドリア「なにいっ！　・・・どうすんだよ！」
コルネ「どうするって、そうだ！　エメリーナなら分かる・・あっ、駄目だ運転中だ」
ドリア「お前、聞いてから来いよ」
コルネ「いいから片っ端から繋がってる物を抜いちまえ！　そうすりゃきっと外れる」
言うや否やコルネ、手当たり次第パイプやワイヤーを抜き始める。
ドリア「いっつもそうだな、お前って奴は。何でも勝手に始めやがって」
ドリアもブツブツ文句を言いながら抜き始める。
ドリア「勝手に大統領なんかになりやがって」と、コルネ、エメリーナが窓を叩いている事に気付く。
コルネ「ああ？　なんだよ」

○同・車内
片手でハンドルを握ったまま窓を叩き、

エメリーナが叫ぶ。
エメリーナ「コルネ大変！　前を見て前を！」
○同・車外連結部
激しい騒音の中、窓を叩きエメリーナが何か叫んでいる。
コルネ「聞こえねえよ。それより前を見て運転しろ、前を」
言いながらふと前を見るコルネ。
先は道路が途切れ、海が迫っている。
コルネ、慌てて叫ぶ。
コルネ「おい！　何やってんだ！　早くブレーキ踏めよ！　ブレーキ！」
○同・車内
エメリーナは何度もスカスカとブレーキペダルを踏んでいる。
エメリーナ「だから、全然効かないのよっ！　ブレーキが！」
○同・車外連結部
コルネが叫ぶ。
コルネ「何やってんだエメリーナ！　エメリーナ！　補佐官ーっ！」
と、外した管を手に、嬉しそうにドリアが戻って来る。
ドリア「おい大統領。抜けたぞ、全部抜けた」
ドリアの手にした管から派手にオイルが噴き出している。
コルネ、真顔でポツリと言い放つ。
コルネ「おい・・・、それ、外していいやつなのかよ」
○海に向かう湾岸道路
トレーラーが海に向かってまっしぐらに突き進んで行く。
後を追う軍用車は慌てて急停車、続々と兵士らが降り、トレーラーに向け発砲し始める。
が、全く止まる気配のないトレーラー。

「あれっ？」という顔をする兵士ら。
トラーラーはふいに視界から忽然と消え去って行く。
次の瞬間、海から聞こえて来る大きな波しぶきの音。
すぐに攻撃をやめ、崖に向かう兵士ら。
が、下を覗き込むや否や、皆呆れ顔に変わり、肩を竦めつつ半笑いを浮かべ、ぞろぞろと引き上げて行く。
海の彼方には険しい雪山、流氷も静かに浮かんでいる。

○古びた倉庫（夜）
マハジが足早に倉庫にやって来る。
急ぎ彼は階段を下りて行く。

○シェルター内（夜）
ノックもそこそこにマハジ、扉を開け、中を覗き込む。
ソファーには毛布を頭から被り、ブルブルと震えるコルネ、ドリア、エメリーナの姿。
頻りに何かぼやいている。
コルネ「ああ・・・、生きているのが不思議なくらいだ」
エメリーナ「もう私、今日という今日こそ、大統領補佐官を辞めさせて頂きます」
ドリア「ブレッド・オア・ライスも解散だ」
コルネ、マハジに気が付く。
コルネ「やあ・・・、マハジ」
マハジはポカンとしている。
マハジ「・・・どうしたんですか？」
力なくコルネが答える。
コルネ「いやちょっとね、海水浴を」
マハジ「こんな、最果ての海でですか？」
ドリアとエメリーナも力なく口を開く。
ドリア「冷たくて・・・気持ちよかったよ」
エメリーナ「美容にも・・・最高」
マハジは呆然と三人を見つめている。
虚ろな目でコルネが訊ねる。

コルネ「何か御用？」
マハジ「あ、あの・・・、ニュースを録画して来たんですけど、ご覧になりますか？」
コルネ「・・・ニュース？」
ぼんやりと考えるコルネ、突然ハッと目を見開き、
コルネ「ああっ！　そう言えば・・・、朝からそれどころじゃなくて、ニュースを見るのをすっかり忘れてた！」
コルネ、毛布を投げ捨て立ち上がる。
コルネ「マハジ！　一体どうなってんだ！世間は」
マハジ「え？　・・・ええ」
マハジ、ポケットからＵＳＢメモリーを取り出し、テレビに差し込む。
マハジ「昼のニュースです」
リモコンのボタンを押すマハジ。
仰々しいテーマ音楽と共にニュースが始まり、女性アナＣが画面に現れる。
女性アナＣ（画面）「ロンガイヤの皆さん、こんにちは、昼のニュースです。我が国では只今、トイレットペーパーが非常に不足しております」
コルネ、思わず身を乗り出し、
コルネ「おお、これこれ」
女性アナＣ（画面）「何者かによる大量買い占めが原因と思われますが、現在当局により、詳しい調査が進められています」
画面は店の前で行列を作る人々の様子に切り替わる。
店員が一つ一つ、手渡しでトイレットペーパーを売り、客は皆談笑しながら列に並んでいる。
女性アナＣ（声）「それを受けてスーパーやドラッグストアでは数量限定で販売する店が増え、あちこちでトイレットペーパーを求める人々の行列が目立ち始めています。一方製紙メーカーでは、すでに増産体制を強化しており、供給はじきに回復するだろうとの見解を示しております」

画面は再び女性アナCに切り替わる。
彼女はちょっと二ヤつきながら、
女性アナC（画面）「さて、一連の騒ぎを耳にした最高議長のヘル・モンジャナ氏は、次のような見解を述べております」
画面は執務室のソファーに腰掛け、猫を抱きながらゆったりと語り掛けるモンジャナに切り替わる。
モンジャナ（映像）「誰かは知らんが、トイレットペーパーを買い占めた者に訊ねる。今頃、君の家では排水管が詰まり、さぞや困り果てているのではないのかな？」
そう言い、高笑いをするモンジャナ。
画面は笑顔の女性アナCに切り替わる。
女性アナC（画面）「では次のニュースです」
録画が終了する。
テレビをジッと睨み付けていたコルネ、ふて腐れ気味に呟く。
コルネ「なんだモンジャナのあのジョーク、全然面白くねえぞ。お笑いのセンス、ゼロカロリーだな」
ドリアとエメリーナ、ため息混じりに、
ドリア「やっぱりな・・・、思った通りだ」
エメリーナ「こんな程度よね、世間て」
ドリア「あ〜あ、とんだ骨折り損だったな」
コルネは苦虫を噛み潰したような顔で黙っている。
と、マハジ、ふいにもどかし気に声を掛けて来る。
マハジ「あの・・・」
マハジ、リモコンを手に取り、
マハジ「続いて・・、夕方のニュースです」
コルネ「えっ？」
ポカンとするコルネ。
ドリアとエメリーナもキョトンとしている。
コルネ「まだ・・、あるの？」
マハジ、黙ってボタンを押す。
と、衣装を変えた女性アナC、昼とは打って変わり険しい表情で現れる。

女性アナC（画面）「ニュースをお伝えします。トイレットペーパー不足が思わぬ波紋を広げております。各地から中継が繋がっています」

画面はとある大型スーパーマーケット切り替わる。

パラパラと客のいる店内で、記者Bがリポートしている。

後ろの棚には殆ど商品が残っていない。

記者B（画面）「市内にある大型スーパーに来ています。本日未明から、なぜか大量に食料品を買い求める客が増え始め、ご覧の通り現在棚からは肉や魚、野菜はもちろん、麦や米、缶詰などの保存食まで殆ど無くなってしまっています。関係者の話ですと、今の所、新たな入荷の見通しは立っていないとの事です」

画面がホームセンター前に切り変わる。

多くの人々が詰め掛ける店頭で、記者Cがリポートしている。

記者C（画面）「このホームセンターでは休業にも関わらず日用品を求める多くの人が押し寄せ、中には留守を預かる警備員に詰め寄る客の姿まで見受けられます。経営者らは対応に追われ、皆、苛立ちの表情を隠せないといった様相です」

女性アナC（画面）「経済学者の中には、この混乱は暫く続くのではないかとの見解を示す者もおり、事態は予断を許さぬ状況になりつつあります。全国の皆様、くれぐれも周囲に流され短絡的な行動に走らぬよう、私からもお願いいたします」

録画が終了する。

唖然としているドリアとエメリーナ。

エメリーナ「騒ぎが・・・、大きくなってる」

ドリア「こりゃ、ひょっとして・・、本当に戦争やってる場合じゃないかも」

コルネまで信じられないという顔。

コルネ「マジかよ・・・」

ドリア、ふとコルネを睨み、
ドリア「マジかよって、お前・・・」
コルネ「えっ？　・・ああ」
コルネ、じわじわと喜びが湧いて来る。
コルネ「そうか、混乱が広がって来たか」
そして、急に自慢げに言い放つ。
コルネ「見ろっ！　やっぱ俺の言った通りになったじゃねえか！」
思わず眼を剥くドリアとエメリーナ。
ドリア「なんだよ、調子のいい野郎だな」
エメリーナ「そうよ。幾らそれだけで大統領になったからって・・」
コルネ「バカヤロ、それだけじゃねえや！」
すっかり上機嫌になり、高らかに笑うコルネ。
と、再びマハジが割り込んで来る。
マハジ「あのう、すみません」
コルネ「ええっ？」
マハジ、リモコンをテレビに向け、
マハジ「そして・・・、今しがた入って来たニュースです」
コルネ「なに、まだあるの？」
笑いながらコルネ、画面に目を向ける。
女性アナCが登場する。
髪は乱れ、目は窪んでいる。
コルネ「あれ？　何だあの女、急に老けたな」
女性アナC（画面）「緊急事態が起こりました。現在各地で石油の供給が全面的にストップしています。原因は急激な需要の上昇とみられておりますが、詳しい状況はまだ分かっておりません」
画面は中継映像に切り替わる。
給油を待つ車の長い行列が出来ている路上で、突然バイクに乗った荒くれ者たちが現れ、バットやチェーンを振り回し、燃料の奪い合いを始める。
モヒカン刈りのマッチョな男が叫ぶ。
「石油だ！　石油をよこせ！」
あちこちで車は横転し、その先のガソリンスタンドは激しく炎上している。

そんな中、物陰に隠れ、必死の形相で記者Ｄがリポートをしている。
記者Ｄ（画面）「最早地上は地獄絵図と化しています。スタンドでは燃料を買い求められなかった客が暴徒化し、店は原型を留めない程破壊され、辺りは一面火の海に包まれています」
と、突然記者Ｄの悲鳴と共に映像が乱れ、中継が途絶える。
女性アナＣが必死に呼び掛ける。
女性アナＣ（声）「どうしましたか？　何があったのですか？　答えてください！　答えてください！　答えて・・・」
中継映像は途絶えたまま。
半泣きで女性アナＣは伝える。
女性アナＣ（画面）「皆様、今は充分に身の安全を確保し、不要不急の外出は控える様、ご注意願います」
録画が終了する。
無言でテレビを消すマハジ。
コルネもドリアもエメリーナもすっかり笑顔が消え、皆、黙りこくってしまっている。
エメリーナがポツリと言う。
エメリーナ「トイレットペーパーを買い占めただけなのに・・・」
コルネもボソッと呟く。
コルネ「何で石油まで無くなるんだ？」
ドリアがブツブツと答える。
ドリア「そりゃお前、あれだろ・・。人間尻くらい拭かなくても生きて行けるけど・・、ってやつじゃないのか？」
マハジが静かに口を開く。
マハジ「この国の人々は以前から政府に不満を持っていました。それが今回の件で一気に噴き出したんだと思います」
マハジ、コルネに目を向け、
マハジ「どうやら作戦は、大成功だったようですね」
コルネ「・・・」

マハジ「と言うより、大成功し過ぎかも知れません」
ふとため息を吐き、コルネがこぼす。
コルネ「俺は・・・、大統領失格だ」
思わずあんぐりと口を開けるドリアとエメリーナ。
ドリア「なんだ、今頃気付いたのかよ」
コルネ「トイレットペーパーは返す」
エメリーナ「そんな、捕まった万引き少年じゃあるまいし、返せば済むって問題じゃ」
コルネ「・・かも知れん。だけど、何か手を打たなけりゃ」
ドリア「敵国だぞ」
コルネ「関係ねえよ。こんな状況黙って見てられるかってんだ」
エメリーナ「なんか・・・、やっと国家元首らしい事を言うようになったわね」
コルネ「配送の手続きをして来る」
コルネ、力なく立ち上がり、トボトボと部屋を出て行く。

○モンジャナ宮殿・執務室（夜）
デスクでモンジャナが黙ったままジッと一点を睨んでいる。
そばでアリナンが悲痛な表情で訴えている。
アリナン「閣下、今日という今日は言わせていただきます。こんな状況で侵攻など強行したら・・・、ロンガイア連邦は・・・、崩壊しますぞっ！」
モンジャナ、顔を顰めしばらく考え、そして、渋々口を開く。
モンジャナ「仕方がない」
込み上げる怒りを押し殺しモンジャナ、言葉を絞り出す。
モンジャナ「侵攻は・・・、一旦中止だ」
アリナン「ありがとうございます！　素晴らしいご決断です！」
ホッと胸を撫で下ろすアリナン。
モンジャナはジッと空を睨んでいる。

モンジャナ「くそぅ・・・、今まで泳がせていたのが間違いだった」
アリナン「・・・は？」
ポカンとするアリナン。
と、ふいに声を荒げるモンジャナ。
モンジャナ「奴を始末しろ！」
ポカンとしているアリナン。
すると、どこからかイワンの声。
イワンの声「承知いたしました」
思わず辺りを見回すアリナン。
いつの間にかカーテンの裏にイワンが立っている
イワン「早速手の者を差し向けます」
ポカンとしたまま立ち尽くすアリナン。
イワンは深々と頭を下げ、カーテンの陰からスッと消えて行く。

○青果店（朝）
所狭しと果物を並べている青果店、コルネがオレンジを買い求めている。

○とある部屋（朝）
白壁の質素な部屋。
壁に飾られた十字架に跪き、マハジが祈りをささげている。
マハジの着ているジャケットから覗くガンホルダー、中にはひっそりとワルサーＰＰＫが収まっている。

○シェルター内・寝室（朝）
エメリーナが鏡の前で髪を整えている。
矢庭にエメリーナ、タイトスカートをたくし上げ、化粧棚からデリンジャーを手に取りガーターベルトに差し込む。

○古びた倉庫（朝）
フォークリフトが盛んに走り回り、段ボール箱を運び出している。
倉庫内に積み上げられた在庫は半分程に減っている。

なぜかその箱陰に隠れるドリアの姿。
彼はベレッタを手にニヤリと笑う。
ドリア「ついにその時が来たぜ、コルネ」

○古びた倉庫・外観（朝）
コルネがオレンジが一杯に詰まった紙袋を手に帰って来る。
倉庫から出発するトラックがクラクションを鳴らし、コルネに挨拶する。
コルネはニコニコと手を振っている。
コルネ「よろしく頼むよーっ」
と、巡回中の如何にも人の好さそうな太った警備員がやって来る。
太った警備員「ああ、お早うございます！
アーン・パンマン常務」
コルネ「おう、いつもご苦労さん。・・・あ、ちょっと」
そのまますれ違おうとしてコルネ、ふと振り向き、オレンジを一個手に取り警備員に渡す。
コルネ「一つどう？」
太った警備員「ああ・・、すいませんねえ」
警備員はオレンジを手の上で転がし、嬉しそうに去って行く。

○古びた倉庫（朝）
積み込みが完了し、出て行く作業員。
と、そこへコルネが帰って来る。
倉庫内はひっそりと静まっている。
箱の裏に隠れるドリアの耳に、近づいて来るコルネの足音が響いている。

○シェルター・扉（朝）
シェルターを出たエメリーナ、倉庫へ向かう階段を上がる途中、ふと立ち止まり、ガーターベルトからデリンジャーを抜き取る。
エメリーナ「さて、下品なコルネにこいつをお見舞いしてやらなきゃ」

○古びた倉庫（朝）
袋を抱え、コルネが在庫を数えつつ歩いていると、奥の方にマハジの姿。
コルネ、嬉しそうに声を掛ける。
コルネ「やあマハジ、取り合えず半分くらいは片付いたよ」
コルネに気付いた途端にマハジ、なぜか目の色を変え、駆け寄って来る。
ニコニコとマハジに話し掛けるコルネ。
コルネ「この分なら次の便でほぼ・・」
無言で近づくマハジ、突然懐からワルサーＰＰＫを抜き取り、コルネに突き付ける
マハジ「コルネさん！」
コルネ「！」
マハジは叫ぶ。
マハジ「伏せて！」
訳も分からず身を屈めるコルネ。
その拍子に袋から零れるオレンジ。
倉庫の床をコロコロとオレンジが転がって行く。
と、なぜか反対方向からも一個のオレンジが転がって来る。
コルネが不思議そうにそのオレンジに手を延ばすと、そこにはサイレンサー付きブローニングを身構える太った警備員が仁王立ちしている。
警備員に怒鳴るマハジ。
マハジ「諜報部の命令だな！　その銃を」
だがマハジの言葉が終わらぬうちに、立て続けに火を噴く警備員の銃。
マハジは全身に銃弾を浴び、その場に倒れ込んでしまう。
コルネ「なにっ！」
コルネ、思わず警備員に目を向けると、彼も動揺しているのか、恐ず恐ずと後ずさりを始め、巨体を揺さぶりながらよろよろとその場を逃げ出して行く。
すぐにコルネ、マハジの手からＰＰＫを掴み取り、警備員に狙いを定める。

が、鳴り響くのはカチャカチャという
引き金の音だけ。
コルネ「弾入ってねえじゃねえか！」
ベレッタを手にしたドリアが駆け付け
て来る
コルネ、急いでベレッタを奪い取り、
引き金を引く。
銃口からピューッと飛び出す水。
コルネ「水鉄砲じゃねえか！」
エメリーナも飛んで来る。
コルネ、慌てて彼女の手からデリンジ
ャーをむしり取り、引き金を引く。
銃口からシュッと飛び出す霧。
コルネ、ちょっと匂いを嗅ぎ、
コルネ「シャネルの５番じゃねえか！」
そうする間にも警備員は逃げて行く。
急いで追い掛けようとするコルネ。
だがそれを制止するマハジの声。
マハジ（声）「いいんです！」
コルネがハッと振り返ると、マハジは
床を血に染め、ぐったりと横たわって
いる。
コルネ「マハジ！」
思わずコルネ、駆け寄りマハジを抱き
起こす。
息も絶え絶えにマハジは口を開く。
マハジ「あの人にも家族がいます」
コルネ「こんな時に何言ってんだ。待ってろ、
今すぐ救急車を呼んでやる」
すぐにスマホをを取り出すエメリーナ。
コルネ、マハジに問い掛ける。
コルネ「一体何者なんだ、あいつは」
マハジ「長年働いている、うちの社員です」
コルネ「そんな男が、何で？」
マハジ「多分、イワンに、弱みでも握られて
いたんでしょう」
コルネ「イワン？」
マハジ「諜報部のボスです。猜疑心が服を着
ているような男ですよ。前から僕は目を付
けられていたんです」

コルネ「気付いてたのに、何で手を打たなかったんだ？」
マハジ「それは・・、下手に動くとあなた方まで危なくなると思い」
コルネ「そんな、どこまで人がいいんだよ、マハジ」
失い掛ける意識を必死に堪え、マハジは告げる。
マハジ「コルネさん・・、あなたにはまだ、やらなければいけない事があります・・・。大統領として」
コルネ「いいからマハジ、もう喋るな」
マハジ「いいえ・・、これだけは言って置かないと。実は１３番倉庫に、あるモノが」
コルネ「あるモノ？」
マハジの意識が途絶える。
コルネ「マハジ！」
マハジ、辛うじて意識を取り戻す。
マハジ「コルネさん、あなたに会えて、良かった。だって、ブレッド・オア・ライスの、生コントを、見れ・・・」
言い掛けマハジ、息絶える。
コルネ「マハジ！　マハジ！　マハジ！」
コルネ、必死に呼び掛ける。
エメリーナは涙を堪えながら電話を掛けている。
エメリーナ「ええ、出来るだけ早く。手遅れかも知れないけど」
コルネ「マハジ！　マハジ！　マハジ！」
夢中で名を呼び続けるコルネ。
マハジは全く反応を示さない。
居たたまれずドリアが口を挟む。
ドリア「やめろコルネ、いくら呼び掛けても、もうマハジは」
コルネは呼び続ける。
コルネ「目を開けてくれマハジ！　マハジ！」
と、ふいにドリアが声を上げる。
ドリア「お、おい！　コルネ！」
何事かとドリアに目を向けるコルネ。
コルネ「なんだ？　どうかしたのか？」

エメリーナも叫ぶ。
エメリーナ「見て！　コルネ！」
コルネ「何を？」
ドリア「自分をだよ！」
言われてコルネ、我が身に目を向け、
ハッと息を呑む。
いつの間にか光に包まれている。
よく見ると、光はマハジの傷口から放
たれている。
コルネ「なんだ・・・、これは」
光はどんどん強くなり、マハジの体を
覆い尽くして行く。
驚き、つい手を放すコルネ。
すると、マハジはフワリと浮き上がり、
そのままゆっくりと上昇、三人の頭上
高くまで到達し、ふいに忽然と消え去
ってしまう、跡形もなく。
呆然と天井を見つめる三人。
ふとコルネ、マハジの倒れていた床に
目を落とす。
そこには血痕すら残っていない。
オレンジだけが転がっている。
声も出ず、黙り込む三人。
ポツリとドリアが呟く
ドリア「ひょっとして、俺たちって・・」
エメリーナも目を丸くしながら、
エメリーナ「ずっと・・・、世に言う神様と、
一緒だった・・・、って事？」
再び黙り込む三人。
ふとコルネが口を開く。
コルネ「道理で仏様じゃねえなんて言う訳だ」
エメリーナ、フッと微笑み、
エメリーナ「そうね、頭の上で輪が光ってる
方だものね」
ドリアもちょっと噴き出し、
ドリア「・・って事は、その二人って・・・、
知り合いだったのか？」
コルネ「神と・・・仏が？」
エメリーナ「お友達？」
急にゲラゲラ笑い出す三人。

コルネ「にしても人類が猿のままでよかった、
だなんて、言ってくれるよな」
エメリーナ「きっと内心、お怒りになってる
んでしょ？　神も仏も」
ドリア「そりゃ、こんな世の中じゃ」
大笑いする三人。
腹を抱え笑っている。
笑いながらコルネが口を開く。
コルネ「じゃ、そろそろ行こうか」
ドリア「ああ」
エメリーナ「分かったわ」
三人は颯爽と倉庫を後にする。

○広い通路
倉庫群を貫く広い通路を、肩で風切り
コルネ、ドリア、エメリーナが横一列
に歩いて来る。
三人は１３と記された巨大な倉庫へと
向かって行く。

○１３番倉庫
倉庫の中へ消えて行くコルネたち。
と、すぐにキーンと響き出すジェット
エンジンの音
と共に倉庫の屋根が開き、中からゆっ
くりと姿を現す特殊戦闘ヘリ。

○特殊戦闘ヘリ・コックピット
操縦桿を握るエメリーナ。
後部にはコルネとドリアが座っている。
エメリーナが訊ねる。
エメリーナ「目指す先は？」
遥か地平線を見定め、コルネは答える。
コルネ「ロンガイア連邦総司令部統合基地」
エメリーナ「ラジャー！」

○空を飛ぶ特殊戦闘ヘリ
ホバリングをしていたヘリ、機首を傾
け空の彼方へ消えて行く。

○同・コックピット
エメリーナ、操縦桿を操りながらレーダー画面に目を向け、
エメリーナ「早速お出迎えが来たみたいよ」
コルネ、後ろからレーダーを覗き込み、
コルネ「出迎え？」
エメリーナ「戦闘機が二機、向かって来るわ」

○上空
轟音を上げ、特殊戦闘ヘリのすぐそばを二機の戦闘機がかすめ、後方へと飛び去って行く。
と、戦闘機、突然方向を変え、ヘリを追尾して来る。

○特殊戦闘ヘリ・コクピット
エメリーナ「やーね、スクランブル体制に入ったわ」
コルネ「何それ？」
ドリア「まさか」

○追尾する二機の戦闘機
機体下からいきなりガドリング機関砲が飛び出し、勢い良く火を噴く。

○特殊戦闘ヘリ・コクピット
機体に当たる激しい銃弾の音。
ドリア「うわっ！　マジだぞ！」
コルネ「まずいなこりゃ」
だがエメリーナは平然と操縦桿を握っている。

○追尾する二機の戦闘機
再び火を噴くガドリング砲。
ヘリ目掛け、曳光弾の軌跡が突き進む。

○特殊戦闘ヘリ・コクピット
表情一つ変えずひょいひょいと操縦桿動かすエメリーナ。

○空を飛ぶ特殊戦闘ヘリ
軽く左右にスウェイし、曳光弾をすり抜ける特殊戦闘ヘリ。

○特殊戦闘ヘリ・コクピット
コルネ「ええっ！」
ドリア「避けた！」
エメリーナ「まあ、この機体なら２５ミリ砲弾くらい大した事ないけど・・・、でも新車が傷つくの、ちょっとイヤでしょ？」

○追尾する二機の戦闘機
弾が切れ、カラカラと空回りするガドリング砲。
すぐに主翼のミサイルが発射される。

○特殊戦闘ヘリ・コクピット
操縦パネルの「ＬＯＣＫＥＤ・ＯＮ」表示が点滅し始める。
コルネ「おい、それ、凄くヤバいんじゃ」
すかさず「ＲＡＴ・ＬＥＡＤＥＲ」ボタンを押すエメリーナ。

○空を飛ぶ特殊戦闘ヘリ
いきなりヘリから四方八方に無数の光る物体が飛び出して来る。
次々と光る物体に誘導され、ミサイルは空中で大爆発を起こして行く。

○特殊戦闘ヘリ・コクピット
コルネもドリアも呆然とエメリーナを見つめている。
するとエメリーナ、眉一つ動かさずに今度は足元にある謎のボンベのコックを開け、ニヤリと笑う。
エメリーナ「いつまでもあんたたちと遊んでる暇はないの」
途端に機内に鳴り始めるアラート音。
オロオロとコルネが訊ねる。
コルネ「今度は何？　何なの？」

操縦パネル中央の一番ヤバそうな表示、
「ＮＩＴＲＯ・ＢＯＯＳＴ」が赤く、
激しく点滅する。
エメリーナ「いいわね、行くわよ」
点滅するボタンを押すエメリーナ。

○空を飛ぶ特殊戦闘ヘリ
突然ヘリから激しく噴射するジェット。
特殊戦闘ヘリは戦闘機を置き去りにし、
雄叫びを上げ音の壁を突き破り、瞬く
間に遥か彼方へと消えて行く。

○特殊戦闘ヘリ・コクピット
コルネとドリアは思いっ切り座席に張
り付けられ、目を回している。
コルネ「あ、あ、あ・・」
ドリア「な、何なんだこいつは？」
操縦桿を操りつつ、嬉しそうにエメリ
ーナが答える。
エメリーナ「・・・これね、世界中の軍部が
その存在をひた隠しにしている悪魔の兵器、
サンダーウルフなのよ。すっごいでしょ！
私も初めて操縦するわ」
ドリア「そうじゃねえ！　お前は一体何者な
んだって話だよ！」

○ロンガイア連邦総司令部統合基地
広大な敷地に整列する厖大な戦闘機、
爆撃機、輸送機、ヘリの数々。
堅牢な建物が並ぶ施設内にはミサイル
や大砲、戦車など、様々な兵器や戦闘
車両で埋め尽くされている。
そんな中、建物の外には（期限切れ）
と書かれた爆薬の木箱が山積みにされ、
ゴミ捨て場では（燃えないゴミ）のコ
ンテナ一杯に、錆びた銃火器等が無造
作に捨てられている。

○同・管制塔・外観
基地の中央にある一際高い管制塔。

屋上にはレーダーが幾つも備え付けられている。

○同・司令室
管制官が慌ただしく動き回る司令室。
レーダー画面を覗きながら管制官Ａが報告する。
管制官Ａ「総司令官。例の施設より発せられた未確認飛行物体が接近しています」
中央の椅子にでんと座るコーデ・ネート総司令官が思わず身を起こす。
ネート「何？　迎撃に失敗したのか？」
管制官Ａ「どうやらそのようです」
ネート「まさか？　あの精鋭の攻撃をすり抜けるなんて・・。正体はなんなんだ？」
管制官Ａ「よく分かりません」
険しい顔でネートは命令を下す。
ネート「よし、直ちに攻撃態勢に取り掛かれ」
管制官Ａ「はっ」

○同・敷地
高い防護壁に囲まれた敷地内。
兵士ら、急ぎ地対空ミサイルを作動させ、狙いを定める。
と、彼方に飛行物体が見えて来る。

○同・司令室
無線機から響く兵士Ｂの声。
兵士Ｂ（声）「ターゲットを捕捉しました。戦闘ヘリのようです」
ネート、マイクを手にする。
ネート「直ちに撃墜せよ」
兵士Ｂ（声）「・・・」
応答がない。
ジッと無線機を睨み付けるネート。
一向に応答がない。
痺れを切らし、ネートが問い質す。
ネート「どうしたんだ？」
ようやく動揺した兵士Ｂの声が返って来る。

兵士Ｂ（声）「だ、駄目です！　我々には、とても、撃てません！」
ネート「なにっ！」
ネート、急ぎ司令室を後にする。

○同・敷地内
兵士らは皆、恐れおののきながら天を仰いでいる。
ネートがジープで駆け付けて来る。
ネートは兵士らが見上げる方向に目を向け、愕然とする。
ネート「あ、あれは・・・」
戦慄の表情を浮かべ、彼は呟く。
ネート「か、神の使いか・・・」

○同・上空
戦闘ヘリが音もなく、舞うように宙に浮かんでいる。
そしてその上部には眩いばかりの深紅の光輪が燦然と輝いている。

○特殊戦闘ヘリ・コクピット
静寂に包まれているコクピット内。
穏やかな表情でコルネが口を開く。
コルネ「さてと、始めるか」
エメリーナ「ラジャー」
エメリーナ、点灯している「ＷＨＩＳＰＥＲ・ＭＯＤＥ」ボタンを解除する。

○統合基地・上空
途端に空を切り裂くローターの騒音が辺りに轟く。
光輪も消え失せ、拡声器から妙な節回しで喋るコルネの歪んだ声が響き渡る。
コルネ（声）「大変、お騒がせ致して～おります。毎度～お馴染み～、チリ紙交換で～、ございい～～ます」

○同・敷地
眼を剥き、空を見上げるネート。

ネート「なにっ！」
コルネ（声）「施設内でご不要になりました武器、弾薬、核兵器、はございませんか？ございい～ましたら、多少に関わらずお声掛け願い～～ます」

○特殊戦闘ヘリ・コクピット
コルネ、マイクを手に呼び掛ける。
コルネ「ソフトで肌触りの良い、トイレットペーパーと、交換～いたし～～ます」
コルネの後ろにはトイレットペーパーがギッシリと積み込まれている。

○統合基地・敷地
ネートは呟く。
ネート「か・・・紙の使いか・・・」
と、強烈な風を舞い上げ、特殊戦闘ヘリは高度を下げて来る。
そして、兵士らが呆然と空を見上げる中、あれよあれよという間に敷地内に着陸をして行く。

○特殊戦闘ヘリ
エンジンが停止し、回転を緩めるメインローター。
その羽の上にはプスプスと煙を上げる発炎筒が括り付けられている。

○統合基地・敷地
戸惑いの表情を浮かべ、遠巻きにヘリを見つめる兵士たち。
ネートも唖然として突っ立ったまま。
ヘリの周囲には、何事が起きたのかとどんどん兵士が集まり、すでに黒山の人だかりが出来ている。

○特殊戦闘ヘリ
と、突然プシュと音を立てるハッチ。
ハッチは大きく開き、タラップになる。

○統合基地・敷地
まるで宇宙人でも現れるのかとばかりに驚き、後ずさりする兵士たち。

○特殊戦闘ヘリ・搭乗口
と、中からひょっこり現れるコルネ。
彼は笑顔で手を振りタラップに立つ。

○統合基地・敷地
まるで化け物でも見たのかとばかりに騒めく兵士たち。
が、皆その正体に気が付くと、急にあちこちから声が飛んで来る。
「コルネだ！」「ドン・コルネだぞ」
「腰抜け大統領だ」「国家予算泥棒だ」
「アンパンマン面したバイキンマンだ」

○特殊戦闘ヘリ・搭乗口
コルネ、「バイキンマン」の声に一瞬ムッとするが、すぐに気を取り直し、マイクを手に声を発する。

○統合基地・敷地
ヘリの拡声器からコルネの声が響く。
コルネ（声）「諸君、聞いてくれ。ここがロンガイア連邦最大の基地であり、かつ、世界屈指の武器や兵器を有する唯一無二の要塞である事は私も心得ている。技術の粋を結集した敵国の軍事中枢に飛び込むなんて、正直生きた心地はしないが・・・、だが私は今、大きな感銘を受けている。よくもこれだけの武器や兵器を揃えたものだと」
兵士らは皆、訝しげにコルネを睨んでいる。

○特殊戦闘ヘリ・搭乗口
コルネ、ふいに遠い目で語り出す。
コルネ「そう、今日まで人類が創り出して来た武器や兵器の数々、それらはただ屈強なだけではない、どれも皆美しい。ハブと呼

ばれた世界最速の偵察機ロッキードＳＲ７１。検漏堅固な動く要塞シュトルムティーガー。機動性に優れた空の貴婦人ミグ２９。そして宇宙にまでその名が轟く戦艦ヤマト」

〇統合基地・敷地

ポカンと聞き入る兵士たち。

ネートも聞き耳を立てている。

コルネ（声）「俺も子供の頃は随分憧れた。プラモも散々作った。銃だってカッコいい。自動小銃のベストセラーＡＫ４７カラシニコフ。シンプルで壊れにくいトカレフＴＴ３３。思わず横撃ちしたくなるギャングの定番マシンガンマックテン。更に銀玉鉄砲のモデルと言えばやっぱり俺たちのコルトガバメント。極め付けは６発撃ったかまだ５発かつい聞きたくなるマグナム４４と来たもんだ。まあ兎に角、魅力的な武器や兵器を数え上げたらきりがない。もし世の中に戦争がなかったら、人類の進歩などあり得なかったと言っても決して過言ではないだろう」

〇特殊戦闘ヘリ・搭乗口

と、コルネ、突然語気を強める。

コルネ「だがそんな強く、美しく、魅力的な人類発展の象徴たる武器や兵器にも、一つだけ大きな欠点がある」

一瞬間を置き、

コルネ「それは、持っているとつい使いたくなってしまうという事だ」

〇統合基地・敷地

唖然とコルネを見つめる兵士たち。

コルネ（声）「だから今日は諸君にお願いがあって来た」

〇特殊戦闘ヘリ・搭乗口

コルネ、兵士らをグッと見まわし、

コルネ「今すぐ武器や兵器を捨ててくれ」

○統合基地・敷地
途端に兵士らの間にどよめきが走る。
○特殊戦闘ヘリ・搭乗口
どよめきを遮るようにコルネは続ける。
コルネ「もちろん無条件とは言わない。もし諸君が武器や兵器を差し出してくれたなら」
コルネ、突然懐からトイレットペーパーを取り出し、
コルネ「代わりにメイド・イン・ソダベナの、柔らか〜いトイレットペーパーを差し上げようではないか！　どうだ、もう質の悪いゴワゴワの尻拭いなんて、おさらばだぞ！」
○統合基地・敷地
騒然とする敷地内。
あちこちから「何言ってんだ、あの男」「気は確かか？」などと言う声が漏れて来る。
○特殊戦闘ヘリ・搭乗口
コルネ、委細構わず話を続ける。
コルネ「しかも、しかもだ。それだけじゃないぞ諸君。今ならキャンペーンとして」
突然、ドリアがコルネの背後に現れ、手に持った洗浄便座を高く突き上げる。
コルネ「世界中で、我が国だけにしかない、この洗浄便座も付けてしまおう！」
ドリア「おおっ！　これはお得だ！」
コルネ「それも、ここだけの話だなんてちんけな事はこの際言わない。ロンガイア連邦の隅から隅までずずずいーっともれなく、全ご家庭にプレゼントだ！」
○統合基地・敷地
再び大きくどよめく兵士たち。
皆、呆然としてコルネとドリアを見上げている。
ネートもあんぐり口を開けている。

すると、突如雲の切れ間から差し込む一筋の光。

○特殊戦闘ヘリ・搭乗口

トイレットペーパーと洗浄便座を掲げたコルネとドリアは光を受け、まるで十戒を掲げるモーセの様に神々しく輝いている。

○統合基地・敷地

ふいに辺りにカシャッと響く金属音。兵士Ｃが持っていた銃を手放している。続け様、別の所から聞こえて来るガツンという重い音。兵士Ｄがバズーカを放り出している。それをきっかけにそこら中から響き出す金属のぶつかり合う音、音、音。皆、次々と武器を投げ捨てている。武器を捨てる音は瞬く間に全体に広がり、大地は拳銃、自動小銃、手榴弾、火炎放射器等々で埋め尽くされて行く。中には周りを気にし、渋々武器を捨てる兵士、無理やり奪われ、捨てらてしまう兵士もいる。

気が付くと、辺りには武器を持った兵士は誰一人いなくなっている。

皆、黙ったまま、ジッとコルネに熱い眼差しを送っている。

ふと、一人の兵士Ｅが呟く。

兵士Ｅ「ドン・・、コルネ」

離れた所からも兵士Ｆの声が響く。

兵士Ｆ「ドン・コルネ」

声があちこちから飛び始める。

「ドン・コルネ」「ドン・コルネ」

拳を上げ、兵士Ｇが大きく叫ぶ。

兵士Ｇ「ドン・コルネ！」

兵士Ｈも拳を振り上げ力強く叫ぶ。

兵士Ｈ「ドン・コルネ！」

後から後から拳を振り上げ叫ぶ兵士が出始める。

「ドン・コルネ！」「ドン・コルネ！」
声はいつしか大合唱になり、あっという間にシュプレヒコールは基地全体に広まって行く。
「ドン・コルネ！」「ドン・コルネ！」
管制官が叫ぶ。軍医が叫ぶ。守衛も叫ぶ、食堂のおばちゃんも叫ぶ。
いつの間にかネートまで拳を振り上げ、ちゃっかり一緒に叫んでいる。

○特殊戦闘ヘリ・搭乗口
コルネはニッコリと笑い、兵士らを見つめている。
ふいに感極まった表情で、一人のとぼけた兵士Ｉがコルネに駆け寄って来る。
兵士Ｉ「コルネさん！　コルネさん！　私、昔からあなたのファンだったよ！」
コルネ「おや？　あんたもかい」
兵士Ｉ「是非、みんなの前でこれをやって！」
そう言い、彼はいきなり手にしたザリガニをコルネの前に付き出す。
戸惑いながらもコルネ、ザリガニを受け取り、恐る恐るそのハサミを自分の鼻先に持って行く。
が、コルネ、突然毅然と兵士Ｉにザリガニを付き返し、言い放つ。
コルネ「あんた人違いしてるだろ！　俺はな、こういうのはやってねんだ！」

○統合基地・全景
統合基地内は、いつまでもいつまでも「ドン・コルネ」コールが響き渡り、その声は遥か上空にまで木霊して行く。

○とある家のドア（朝）
黒服を着た数人の男たちが激しくドアをノックしている。
少しして、ようやく開くドア。
ドアの向こうにはパジャマ姿のイワンが訝しげに立っている。

黒服の男Ａ「ミザール・キクマイナ・イワンだな」
イワン「何だ？　こんな朝早くから」
黒服の男Ｂ「あなたを逮捕する」
イワン、狐につままれたような顔で、
イワン「何の罪で？」
黒服の男Ｃ「国家反逆罪及び・・・、神を冒涜した罪だ」

○モンジャナ宮殿・外観
庭園には落ち葉が降り積もり、噴水も止まっている。

○同・執務室
モンジャナがデスクの椅子に深く腰掛け、ぼんやり空を見つめている。
愛猫はソファーで丸くなっている。
ふとモンジャナ、デスクの引き出しを開け、中を覗き込む。
モーゼルＣ９６がポツンと佇んでいる。
と、突然、ドアの開く音。
モンジャナが入り口に目を向けると、コルネが立っている。
コルネを見つめたまま静かに引き出しを閉めるモンジャナ。
コルネがポツリと口を開く。
コルネ「俺は知ってるぜ。なぜ、この世から戦争が無くならねえのか」
モンジャナ「・・・」
コルネ「それはな、何でもかんでも独り占めしたがる愚かな人間が後を絶たねえからさ」
モンジャナ「私が・・・、そうだと言うのか」
コルネ「ああ・・・。あんたもそうだが・・・、俺も、そうだ」
コルネ、モンジャナに向かってゆっくりと歩き出す。
コルネ「一つ賭けをしようぜ」
モンジャナ「・・・賭け？」
コルネ「俺とあんた、国の指導者同士で一対一の殴り合いをやるのさ」

モンジャナ「殴り合いだと？」
コルネ「俺が勝ったらロンガイアは俺の物だ」
モンジャナ「私が勝ったら？」
コルネ「ソダベナはくれてやる」
言うなりコルネ、ファイティングポーズを取り、モンジャナに向かって行く。
モンジャナ「面白い」
そう呟き、すっくと立ちあげるモンジャナに、コルネはいきなり大ぶりのストレートを放つ。
コルネ「この野郎！　何で俺の国に攻めて来やがった！」
モンジャナ、ひょいと身をかわす。
コルネ、思わずよろけながらも、更にハンマーフックを繰り出す。
コルネ「お陰で支持率ガタ落ちじゃねえか！」
モンジャナ、鮮やかに拳をよけ、ニヤリと笑う。
モンジャナ「君は知らんようだな」
コルネ「何を？」
軽いステップでデトロイト・スタイルの構えを取り、モンジャナは言い放つ。
モンジャナ「私がボクシング、元ロンガイアバンタム級チャンピオンという事をだ」
コルネ「そ・・、そうなの？」

〇同・玄関ホール
石造りの広い玄関ホール。
エメリーナとドリアが焦った様子で何やらアリナンに問い質している。
アリナン「閣下でございますか？　閣下なら今、執務室におられると思いますが」
エメリーナ「えっ？　じゃあコルネはきっと、そこに行ったんだわ」
ドリア「すぐに案内して貰えませんか？」
アリナン「は、はい」

〇同・執務室
コルネはモンジャナに攻め込まれ、ジリジリと壁際まで追い詰められている。

○同・廊下
アリナンに案内され、絨毯の上を早足に急ぐエメリーナとドリア。
アリナン「しかし最高議長と大統領が執務室におられるという事は、首脳会談でもしているのでは？」
ドリア「あいつが？　・・・そんなタマか！」
エメリーナが心配そうに呟く。
エメリーナ「また軽はずみな事をしてなきゃいいんだけど」

○同・執務室
モンジャナに殴られ、コルネの顔はどんどん腫れ上がって行く。
パンチを繰り出しながらモンジャナ、薄笑いを浮かべている。
モンジャナ「フッ・・・、まるで焼き過ぎたアンパンマンだな」
コルネ「お、お前まで言うのか・・・」

○同・廊下
アリナン、先を急ぎながらふと気付き、懐から名刺を出す。
アリナン「あっ・・、わたくし、首相のサモ・アリナンと申します」
エメリーナも慌てて名刺を差し出す。
エメリーナ「ああ、大統領補佐官をしているエメリーナ・ペンネでございます」
ドリアもぴょこんと頭を下げる。
ドリア「大統領相方のムッシュ・ドリアです」
アリナン「おやそうでしたか。これはこれは、どうぞよろしくお願いいたします」
エメリーナ・ドリア「いえいえ、そんな」
立ち止り、頭を下げ合う三人。
アリナン「いやあ、色々と大変でございましたな」
ドリア「まったくですな、ハハハ」
エメリーナ「何だかアリナン首相とは、旨くやって行けそうな気がしますわ、ホホホ」

○同・執務室
モンジャナのパンチを浴び、すっかり満身創痍のコルネ。
モンジャナ「どうした？　今までのはただの遊びだぞ」
コルネはフラフラと拳を構え、焦点の定まらない目をしている。
モンジャナ「そうか、最早返事も出来んのか。じゃあ、そろそろ止めを刺してやろうかな」
モンジャナ、大きく拳を振り上げる。
と、突然キラリと光るコルネの目。
次の瞬間、コルネは頭を下げ全身の力を込めモンジャナに突進して行く。
虚を突かれたモンジャナ、思わずデスクまで突き飛ばされ背中を強打、悶絶しながら振り返ると、そこには野獣の様な目をしたコルネが拳を構えている。
一瞬狼狽えるモンジャナ、ふと視線を落とすと、ぶつかった拍子で開いた引き出しからモーゼルが覗いている。
が、モンジャナ、乱暴に引き出しを戻すとすぐに構えを取り直し、コルネに向かって力一杯拳を振り下ろす。
しかしそこに襲い掛かる更なる強烈なタックル、コルネの石頭がモンジャナの顎に見事にヒット、モンジャナは壁まで突き飛ばされ、ガックリとその場に崩れ落ちて行く。
コルネ、フッと息をつき、呟く。
コルネ「・・芸人のリアクションを真に受けるんじゃねえ」
モンジャナは白目を剥いている。
コルネ「俺はこう見えてもな、学生時代はキレのある渾身のタックルで鳴らしたんだぜ」
ジッとモンジャナの様子を窺うコルネ。
ようやくモンジャナの意識が戻る。
コルネ「カウント・テンだ。ゲームオーバーだな」
モンジャナは黙ったまま俯いている。

コルネ、矢庭に引き出しを開け、モーゼルを手に取る。
コルネ「何でこれを使わなかったんだ？」
モンジャナ「それは・・・、自分用だ」
コルネ、モーゼルの弾を抜き、ソファーで寛ぐ猫にふと目を向ける。
コルネ「ふんっ、つまらねえ事を考えるな。悲しむだろ、たった一人の家族が」
かすれた声でモンジャナが問い掛ける。
モンジャナ「・・・おい」
コルネ「ああっ？・・・なんだよ」
モンジャナ「本当に・・・、国を賭ける気はあったのか？」
鼻で笑い飛ばすコルネ。
コルネ「バカ言ってんじゃねえ、そんなの嘘に決まってんだろ？」
モンジャナ「なに！？」
コルネ「ただの男と男の殴り合いだよ」
モンジャナ「・・・」
コルネ「一人の人間がやっていい事なんて、せいぜいこんな程度だと思わねえか？」
モンジャナ「・・・」
コルネ「え？　大国の支配者さんよ」
ふとコルネ、ドアに目を向ける。
エメリーナ、ドリア、アリナンが唖然とした顔でコルネを見つめている。
コルネ「ああ、いたの？」
ドリア「・・いたよ」
コルネ「どうだ、見事取り返してやったぜ。俺の国をな」
エメリーナ、呆れながら口を開く。
エメリーナ「あなたの国じゃないでしょ？」
ニッコリ笑うコルネ。
その顔はすっかり腫れ上がり、前歯も一本欠けている。

○都会の街角
人々が盛んに行き交う賑やかな大通り。
その一角にあるビルの大型ディスプレイ前に大勢の人だかりが出来ている。

○同・ディスプレイ画面
ベテランアナウンサーAがカメラ前に直立不動で立ち、固い表情でニュースを伝えている。
アナA「この時間は予定を変更してニュースをお伝えしています。まもなく大統領の会見が始まります。繰り返します。まもなく新大統領の就任会見が行われます」

○同・街角
固唾を飲んでディスプレイを見つめる人々。

○同・ディスプレイ画面
チラッと横に目を送り、軽く頷きながらアナA、口を開く。
アナA「会見が始まる模様です。では大統領官邸からどうぞ」

○大統領官邸・会見場
紺の重厚なカーテン前に鎮座する演台、その横には真新しいデザインの国旗が厳かに飾られている。
会場は大勢の報道陣が押し寄せ、数多くのテレビカメラも並んでいる。
と、奥から背筋を伸ばし現れる後ろ姿の人物。
人物は演台に立ち、深々と一礼をする。
そして、ゆっくり顔を上げるその人物、エメリーナである。
しっかりと前を見据え、彼女は第一声を発する。
エメリーナ「私が、新しく誕生したソダロガ合併国の初代大統領、エメリーナ・ペンネでございます」
会場から一斉に拍手が沸き起こる。
エメリーナの隣でサモ・アリナンも誇らしげに拍手をしている。

○都会の街角
ディスプレイに向け大勢の人々も拍手を送っている。

○大統領官邸・会見場
会見場の袖で、コルネとドリアが拍手をしながらコソコソ話している
ドリア「ソダロガ合併国か。国ってやっぱり会社だったんだな」
コルネ「ああ、単なる概念さ」
拍手が収まり、演説が始まる。
エメリーナ「さて、世界初の合併国。そして私はその初の女性大統領という事になる訳ですが、この初めて尽くしの国家の舵取りをこれからどうやって行うべきか、今後私は皆さんに問い掛け続けていかねば・・」
エメリーナの演説は続く。
コルネとドリア、彼女を見つめ、しみじみと語り合う。
ドリア「初めて尽くしか。それを言うなら、俺たちだって『世界初』だよな」
コルネ「ああ、その通りだ。なんたって、元大統領と・・・」
後ろを振り返るコルネとドリア。
ドリア「神様までいるお笑いトリオの誕生だもんな」
マハジがニッコリと微笑んでいる。
コルネ「それにしてもあんた、復活早えな」
こっそり二人に耳打ちするマハジ。
マハジ「実は、御仏のご慈悲にすがりました」
ドリア「なあんだ、知り合いに頼んだのかよ」
声を殺し、笑い合う三人。
マハジの頭上の輪が揺れている。
それを見てコルネ、ついツッコむ。
コルネ「だけどマハジ、その頭の上のヤツ、何とかしてくれよな」

ー終わりー